

【翻 訳】

イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注 (5)

亀谷 学・大塚 修・松本 隆志 訳注

本稿は西暦9世紀（ヒジュラ暦3世紀）の後半に著作活動を行ったイブン・ワーディフ・ヤアクービーの著書『歴史*al-Ta'rikh*』の日本語訳注である<sup>1</sup>。連載の第五回となる今回は、第一部・古代史部分のうち、イエスの由来、生涯、そしてその弟子たちの活動の記述となる。なお、解説・日本語訳注部分については亀谷が元となる原稿の作成を担当したが、それらはすべてメンバー三人による検討、議論を経た成果である。

〈今回の翻訳部分の解説〉

本号に掲載する翻訳は、いわゆる『新約聖書』の四福音書の内容を元としたイエスの由来に関する諸言説、彼の活動と言葉の記述と、彼の死と復活、そしてそれに続いて、『新約聖書』「使徒行伝」の内容を元とした、イエスの弟子たちの活動についての記述となる。

本稿で訳出したテキストの半分以上を占めるのは、彼の由来と彼が本格的な活動を始める前の状況についての記述である。

冒頭ではまず、①マリヤの系譜と彼女によるイエスの出産、②十二使徒、が記述され、その後、各福音書ごとの記述に移る。

「マタイによる福音書」からの記述の内容は、①イエスの系譜と誕生、②ヨハネとの会話、③イエスと荒野の悪魔の問答、④イエスの譬え（「山上の説教」）、⑤神殿建設終了後の祭り、⑥ヨハネの死、となっている。

「マルコによる福音書」からの記述の内容は、①ヨハネによるイエスの洗礼、②ガリラヤでの活動、となっている。

<sup>1</sup> 著者とその著作、写本と刊本、翻訳の状況などについては、亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注 (1)」『人文社会科学論叢』（弘前大学人文社会科学部）8（2020），pp. 123–154にて述べたので、適宜参考とされたい。

なお、以後この同訳注の第一回は「『歴史』訳注 (1)」、第二回である亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注 (2)」『人文社会科学論叢』（弘前大学人文社会科学部）10（2021），pp. 113–154は、「『歴史』訳注 (2)」、第三回である亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注 (3)」『人文社会科学論叢』（弘前大学人文社会科学部）12（2022），pp. 69–100は「『歴史』訳注 (3)」、第四回である亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注 (4)」『人文社会科学論叢』（弘前大学人文社会科学部）14（2023），pp. 45–70は「『歴史』訳注 (4)」と略記する（それぞれ<http://hdl.handle.net/10129/00007041>、<http://hdl.handle.net/10129/00007395>、<http://hdl.handle.net/10129/00007720>、<http://hdl.handle.net/10129/00008126>からダウンロードすることができる）。



の下限となる。とはいえ、この写本自体が、そのテキストの分析から、すでにあるアラビア語訳を書写したものと推定されており、これより古い『新約聖書』『福音書』のアラビア語訳が存在したことはほぼ間違いない。

写本として現存するアラビア語の『新約聖書』を網羅的に調査し、それを分類したヒクマト・カシューフは、アラビア語の『新約聖書』テキストの中からサンプルとして選んだ文の比較を通じて、24種類の写本系統に分類した<sup>3</sup>。その中で最も古い翻訳だと考えられているのはギリシア語あるいはシリア語からの翻訳であるが、彼が最も古い翻訳と位置付けているのは、シリア語から翻訳されたとされるヴァティカン所蔵のVat. Ms. Ar. 13である<sup>4</sup>。カシューフは、フランス国立図書館蔵の『クルアーン』写本 (BNF, Arabe 328) との比較を通じて、最も古い『クルアーン』がそれで書かれているヒジャーズイー体とよく似た書体学的な特徴を Vat. Ms. Ar. 13 が持っているとし、西暦800年前後に書写されたものと推定している<sup>5</sup>。さらにそのテキストには写字生がなにかを見て写している際の特徴が見てとれ、これに先立つアラビア語の『新約聖書』翻訳が存在したと考えている<sup>6</sup>。

ただし、カシューフの調査した写本のうち多数を占めるグループJ (53写本)、グループK (164写本) は、10世紀以降に流通したものだと考えられる<sup>7</sup>。つまり、ヤアクービーが『歴史』を著述した時期には、アラビア語の『新約聖書』翻訳自体は存在していたが、一つのあるいは少数の翻訳版が広く書写され、用いられているような状況ではなかったと考えることができる。

## (2) ヤアクービー『歴史』イエス部分の編集

このような状況も踏まえながら、ヤアクービー『歴史』イエス部分に関して、いくつかの指摘ができるだろう。

まず、ヤアクービー『歴史』におけるイエスの記述は、四福音書に基づいているとは言えるものの、その翻訳、少なくとも逐語訳とは言えないということである。カシューフは、自身の研究に基づく写本分類に依拠して14世紀以前に作成された13の写本を選定し、「マタイによる福音書」につ

---

www.loc.gov/collections/manuscripts-in-st-catherines-monastery-mount-sinai/) マイクロフィルム画像が多数公開されているが、この写本断片については2023年11月現在で公開されていないようである。

<sup>3</sup> Kashouh, *The Arabic Versions of the Gospels*, pp. 38–303.

<sup>4</sup> この写本はヴァティカン図書館のDIGIVATLIBにてその画像が公開されている (<https://digi.vatlib.it/mss/detail/Vat.ar.13>)。

<sup>5</sup> Kashouh, *The Arabic Versions of the Gospels*, pp. 146–147. なおBNF, Arabe 328については、Corpus Coranicumにてその画像が公開されている (<https://corpuscoranicum.de/en/manuscripts/13>)。また、この『クルアーン』写本の詳細については、F. Déroche, *Qur'ans of the Umayyads: A First Overview*, Leiden: Brill, 2014およびF. Déroche, *The One and the Many: The Early History of the Qur'an*, New Haven: Yale University Press, 2022を参照されたい。

<sup>6</sup> カシューフは最終的にそれをイスラム以前のアラビア語の『新約聖書』翻訳に遡るものであると結論している (Kashouh, *The Arabic Versions of the Gospels*, pp. 168–171)。ここではその是非については論じることはしない。Griffith, *The Bible in Arabic*, pp. 49–53も参照されたい。

<sup>7</sup> Kashouh, *The Arabic Versions of the Gospels*, pp. 204, 257, 345–350.

いて、それらのテキストを並べて比較検討できるようにした労作を出版している<sup>8</sup>。それを参照して、ヤアクービーの『歴史』におけるイエスの記述のうち、「マタイによる福音書」の文に近い意味を保持している部分を比較したところ、ヤアクービーの『歴史』のアラビア語テキストは、単語の選択も含めて、そのいずれとも類似の翻訳テキストとは言えないと考えられる。すなわち、ヤアクービーは現存するアラビア語訳『新約聖書』のいずれをも参照せずに、著述を行った可能性が高いと考えられる。

英訳の注釈においては、ヤアクービーの『歴史』におけるイエスの記述の中にも、『ペシッタ』（シリア語聖書）からの翻訳であると示唆する箇所があることが示されている<sup>9</sup>。そのため、ヤアクービーの情報源は、シリア語に由来する可能性が高いと考えられる。また、ヤアクービーのように、四福音書、さらには「使徒行伝」の内容に明らかに基づいたまとまった記述は、ヤアクービー以前あるいは同時代のアラビア語テキストの中には見られない<sup>10</sup>。『新約聖書』のアラビア語訳がヤアクービーの時代に十分に普及していなかった状況と考え合わせると、ヤアクービーの記述は、『ペシッタ』（あるいは可能性はそれほど高くないと思われるが、『ペシッタ』に基づく別のシリア語文書）を利用して組み立てられたと考えてよいだろう。

それではヤアクービーは四福音書および「使徒行伝」の中から、どのような情報を選択して記述を行なったのだろうか。イエス死後の「使徒行伝」に基づく記述を一旦措くとする、ヤアクービーの関心は二つのところにあったと考えられる。

一つは、イエスがどのように生まれ、またどのようにその宣教活動を始めたか、という点である。解説の冒頭で示したように、前半部分は各福音書の中からイエスの「由来」についての記述を中心に描いていると言えるだろう<sup>11</sup>。これは、キリスト教徒の主張する「神の子」としてのイエスという理解に対応する箇所と考えられ、当時のムスリムにとってキリスト教徒との議論の中で最も関心が持たれた部分であったのだろう。

もう一つは、イエスの死についてである。この部分は主に「ヨハネによる福音書」に基づいているようだが、イエスの癒しについての言及とそれに続くラザロの蘇りに関する逸話も、直線的にイ

<sup>8</sup> H. Kashouh, *The Gospels in Arabic: A Comparative Edition of Thirteen Versions from before the 14<sup>th</sup> Century*, vol. 1: *The Gospel of Matthew*, n.p., 2021.

<sup>9</sup> E: 333, n. 307, 334, nn. 308, 311, 336, n. 314, 338, n. 325, 340, n. 331.

<sup>10</sup> 部分的な引用として最も早いと考えられるのはイブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』に見られる「ヨハネによる福音書」15章23節から16章1節までの部分であり、パラクレートスについてアラビア語で記述されている（イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャム編註、後藤明ら訳『預言者ムハンマド伝』全四巻（岩波書店、2010–2012年）、vol. 1, pp. 226–227）。そのほか、9世紀のキリスト教からの改宗者であり医者であるアリー・ブン・ラッバーン・タバリーの著したキリスト教に対する反論の書などには、『新約聖書』の福音書からの引用が含まれる（Griffith, *The Bible in Arabic*, pp. 179–181）。

<sup>11</sup> ただし、「マタイによる福音書」の中から「山上の説教」の内容を多く取り上げているのは、『旧約聖書』における律法についての記述や『詩篇』からの記述と同様に、キリスト教の信仰内容を具体的に示すためのものと考えられる。



エスの死の原因を説明するための物語となっている。そうしてイエスの死と「復活」までを描いた上で、その直後に『クルアーン』4章157–158節の引用を行うことによって、各福音書のその箇所についての真実性を否定していると考えられる。

とはいえ、このイエスの記述の中では、イエスやその弟子たちを指して、「キリスト教徒」という言葉は用いられていない<sup>12</sup>。これは、四福音書に描かれている、そして現在のキリスト教徒が主張しているようなイエスを否定しつつ、一方でイスラーム的な理解でのイエスについては毀損しないための措置であると推定できる。

「使徒行伝」に基づくイエス死後の宣教に関する記述の部分については、ヤアクービー以外のムスリム史料ではその記述はほとんど見当たらない。使徒たちがエルサレムのある部屋に集まったという記述や、パウロの改宗前の行動に関する記述などには、『新約聖書』「使徒行伝」の内容を知らなければ解釈が不可能だろうと思われる箇所もあり<sup>13</sup>、この部分がなんのために書かれたのかを推定することは難しい。しかし、イエス死後の部分の後半部は、記述の中心がパウロの行動についてに移っており、それは必ずしも肯定的に描かれているわけではないように思われる。パウロが捕らえられる直前に、ヤアクービーはパウロが「洗礼された者たちの宗教 *dīn al-Ma'mūdiya*」を定着させるためにアンティオキアへ向かったことを記している<sup>14</sup>。この記述は、「使徒行伝」15章22節に対応していると考えられるが、その中には「洗礼された者たちの宗教」という表現は現れない。「洗礼」という儀礼を強調することによって、イスラーム的ではない儀礼に基づく宗教がこの後広まってゆくということを示していると解釈できるかもしれない。パウロがローマに送られた記述でこのイエス死後の使徒たちの活動についての記述も終わるが、その後キリスト教についての記述が再び登場するのはローマの諸王の記述の中で語られるコンスタンティヌスの改宗と公会議の開催についてとなる。そこではキリスト教にさまざまな分派が存在していたことが語られるが、そうしたキリスト教の「分裂性」が、ヤアクービーの記述の中で示されているとも考えられるだろう。

### 〈凡例の追加と修正〉

訳注に関わる凡例については「『歴史』訳注(1)」pp. 133–134、「『歴史』訳注(2)」pp. 117–118、「『歴史』訳注(3)」pp. 74–75、「『歴史』訳注(4)」pp. 49–50を参照されたい。

本稿において、凡例の大きな追加・修正はない。

#### (1) 略号

本稿で文献表示の際に用いられる略号は以下のとおりである。なお、事典類については、文献表

<sup>12</sup> イエスの「復活」について語る際に一度だけ「キリスト教徒たちの言うところによれば *fi-mā yaqūlu al-Naṣārā*」と用いられているが、これは後世の「キリスト教徒たち」を指しているものと考えられる (L: I, 87)。

<sup>13</sup> L: I, 88, 89.

<sup>14</sup> L: I, 89.

示の際はその項目名で表示し、ページ数は省略する（略号については各号で使用するものについてその都度掲載する）。

L: al-Ya‘qūbī, *al-Ta‘rīkh*, ed. M. Th. Houtsma, Leiden: E. J. Brill, 1883 (repr. 1969). (ライデン版刊本)

M: Manchester, John Rylands Library, Arabic 801. (マンチェスター写本)

C: Cambridge, Cambridge University Library, Qq. 10. (ケンブリッジ写本)

E: M. S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wāḍih Al-Ya‘qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E.J. Brill, 2018.

*EI*<sup>2</sup>: *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, 11 vols., ed. C.E. Bosworth et al., Leiden: E.J. Brill, 1960 (1954–2008).

*EI*<sup>3</sup>: *Encyclopaedia of Islam*, *Three*, ed. Marc Gaborieau et al., Leiden: Brill, 2007–.

(必要に応じてオンラインエディションも用いた

<https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-3>)

*EQ*: *Encyclopaedia of the Qur‘ān*, 6 vols., ed. J. D. McAuliffe et al, Leiden: E.J. Brill, 2001–2006.

『新イスラム事典』：嶋田襄平ら編『新イスラム事典』（平凡社、2002年）

『岩波イスラーム辞典』：大塚和夫ら編『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002年）

『旧約新約聖書大事典』：旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』（教文館、1989年）

『旧約聖書』：旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書〔机上版〕』全4巻（岩波書店、2004–2005年）

『新約聖書』：新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』（岩波書店、2004年）

『ペシッタ』：J. W. Childers tr., G. A. Kiraz ed., *Matthew*, Piscataway: Gorgias Press, 2012; *Mark*, Piscataway: Gorgias Press, 2012; *Luke*, Piscataway: Gorgias Press, 2013; J. W. Childers & J. Prather trs., G. A. Kiraz ed., *John*, Piscataway: Gorgias Press, 2014; R. Kitchen tr., G. A. Kiraz ed., *Acts*, Piscataway: Gorgias Press, 2014.

本稿は科学研究費「初期イスラーム時代歴史叙述におけるカリフ観の史料間比較分析」（基盤研究(C) 21K00901)、「イスラーム時代西アジアにおけるイラン概念の復活と変容」（若手研究20K13193）の研究成果の一部である。

〈訳注〉

マリヤ Maryam の子、メシア al-Masīh<sup>15</sup> たる イエス ʿĪsā

[74] アムラム ʿImrān<sup>16</sup> の妻 ハンナ Hanna<sup>17</sup> は、もし神が彼女に子どもを授けてくれるならば、その子を神に捧げると誓った<sup>18</sup>。彼女がマリヤを産むと、マリヤをアムラム ʿImrān の子 モーセ Mūsā の子 ヤウード Yaʿūd<sup>19</sup> の子 シャウィール Shawīl<sup>III</sup> の子 アラスワー Araswā の子 サフルーン Sahlūn の子 ナフラール Nahrāʾīl<sup>IV</sup> の子 ヤスワー Yaswā<sup>V 20</sup> の子<sup>VI</sup> ザカリヤ Zakariyā<sup>VII 21</sup> に預けた<sup>22</sup>。このザカリヤ

<sup>15</sup> ヘブライ語の mashīah、アラム語の meshīhā に由来し、「油を塗られた者」すなわち「救世主」を指す。ギリシャ語では、音写では messias、意味を訳した語としては chrīstós となる (A. Rippin, “Anointing,” *EQ*; A.S. van der Woude+土戸清・山我哲雄「メシア」『旧約新約聖書大事典』)。『クルアーン』においては、イエスとのみ結び付けられ、イエスの別名あるいは称号としての固有名詞のように用いられており、ヤアクービーの『歴史』を含むムスリムによる諸文献においても同様に用いられている (A.J. Wensinck+C.E. Bosworth, “AL-MASĪH,” *EF*)。

<sup>16</sup> マリヤの父の名は、『新約聖書』には言及されない。一方『クルアーン』では、3章33節、3章35節、66章12節に名が言及されるが、いずれも「アムラムの家族」「アムラムの妻」「アムラムの娘」と、本人が登場するわけではない (J. Eisenberg+G. Vajda, “IMRĀN,” *EF*; Roberto Tottoli, “Imrān,” *EQ*)。イブン・クタイバ『知識の書』は ʿImrān b. Māthān b. al-Yuʿāqīm と (Ibn Qutayba, *al-Maʿārif*, Cairo: Dār al-Maʿārif, [1969], p. 52)、マスウーディー『黄金の牧場』は ʿImrān b. Mārān b. Yuʿāqīm と (al-Masʿūdī, *Murūj al-Dhahab wa Maʿdin al-Jawhar*, ed. Ch. Pellat, Beirut: Manshūrāt Jāmiʿa al-Lubnānīya, 1965–1979, vol. 1, p. 69)、タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は ʿImrān b. Māthān とその系譜を示している (Abū Jaʿfar Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Taʾrīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 15 vols., Leiden: E.J. Brill, 1879–1901, serie I, p. 712)。

ここではアロンの父として言及されるアムラム ʿImrān に準じて「アムラム」と音写した。

<sup>17</sup> ハンナという名前は、マリヤの母の名としては『新約聖書』にも『クルアーン』にも登場しない。イブン・クタイバ『知識の書』およびマスウーディー『黄金の牧場』は、ヤアクービーと同様に系譜を示さず単に Hanna という名のみを示す (Ibn Qutayba, *al-Maʿārif*, p. 52; al-Masʿūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 69)。一方タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は Hanna bt. Fāqūd b. Qabīl と系譜を示した上で、ハンナとザカリヤの妻エリザベト Ashbāʾ が姉妹であるとも言及されている (al-Ṭabarī, *Taʾrīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie I, p. 712)。

<sup>18</sup> 『クルアーン』3章35節にある記述に基づくものか。一方『新約聖書』にはこれに相当する記述は見当たらない。

<sup>19</sup> 系譜のこの箇所に入る人名については、両写本および刊本において単語の一文字目の弁別点が示されていない (稿末の校訂注II参照)。モーセの息子としては、ミディヤンの祭司の娘ツイボラとの間にゲルショムという名の息子がいたことが、『旧約聖書』「出エジプト記」2章2–3節において言及されている (H. Peucker+月本昭男「ゲルショム」『旧約新約聖書大事典』)。また、ゲルショムの子孫として、シェブエル Shebuel という人物が、『歴代誌上』26章24節に登場するが、これがヤアクービーのテキストの系譜においてこの次に現れる Shawīl に対応するのではないかと考えられる。そのため、この箇所にはゲルショムに相当する名が入る可能性があるが、写本の字形からはそのように読める可能性は極めて低い。つまり読みは不明であるが、ここではカタカナに音写するために、両写本の字形に基づきつつ、仮に一文字目をヤウとして読むこととした。

<sup>20</sup> 系譜のこの箇所に入る人名についても、両写本および刊本において単語の一文字目の弁別点が示されていない (校訂注V参照)。ザカリヤの系譜について、イブン・クタイバ『知識の書』は Zakariyā b. Ādhan と (Ibn Qutayba, *al-Maʿārif*, p. 52)、マスウーディー『黄金の牧場』は Zakariyā b. Adaq とする (al-Masʿūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 69)。タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は Zakariyā b. Barkhiyā とする (al-Ṭabarī, *Taʾrīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie I, p. 711)。タバリーの挙げる Barkhiyā は、預言者ゼカリヤの父ベレクヤと混同したものと考えられる (A. E. Ruthy+守屋彰夫「ゼカリヤ」『旧約新約聖書大事典』)。いずれにせよヤアクービーのテキストに現れる名の一文字目を確定する材料とはならず、読みは不明であるが、ここではカタカナに音写するために、両写本の字形に基づきつつ、仮に一文字目をヤウとして読むこととした。

<sup>21</sup> ザカリヤは『新約聖書』「ルカによる福音書」1章5節以降に登場するバプテスマのヨハネの父である。ヨハネは (L: I, 76) においても、ザカリヤの子ヨハネと記されている。「ルカによる福音書」1章では、ザカリヤは祭司であり、聖所において神の使いの言葉を聞いたのち、妻エリザベトがヨハネを身ごもったとされ、そのエリザベトをマリヤが訪ねるという筋立てとなっている。ただし『新約聖書』の四福音書にはザカリヤの系譜は見当たらない。

なお、両者ともザカリヤを大工 najjār であると伝えている (Ibn Qutayba, *al-Maʿārif*, p. 52; al-Masʿūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 70)。

<sup>22</sup> 『クルアーン』3章37節において、神がマリヤをザカリヤに預けたことが語られている。

は神殿の祭司kāhin al-madhbaḥであった。その後ずっとそのような状況であったが、17歳<sup>VIII 23</sup>になった時、神が彼女のもとへと天使を送った。それは彼女に穢れない息子walad zakīyを与えるためであった<sup>24</sup>。彼女についての情報のうち、神が語ったものがあるが、それは身籠ったことを含んでいる<sup>25</sup>。彼女の日数が満ちると、神が言ったように陣痛が彼女を打った<sup>26</sup>。神は、彼女の状況、彼女のもとでの彼の状況と言葉、ゆりかごにおける彼の言葉についても記述している<sup>27</sup>。

彼が産まれたのは、ベツレヘム Bayt Laḥm<sup>28</sup>と呼ばれるパレスティナの村であった。それはカーヌーン・アルアウウル月<sup>29</sup>の24日火曜日のことであった<sup>30</sup>。占星術師マー・シャー・アッラーMā Shā'a Allāh<sup>31</sup>によると、メシアが産まれた年には、上昇点<sup>32</sup>は天秤宮の18度に、木星は逆行しており rāji<sup>an</sup> 処女宮<sup>IX</sup>の31<sup>X</sup>分に、土星は磨羯宮の16<sup>XI</sup>度28分に、太陽は白羊宮の1分に、金星は金牛宮の14度に、火星は双児宮の21度44分に、水星は白羊宮の4度17分にあった<sup>33</sup>。

『福音書』の著者たち aṣḥāb al-Injīl ということは、彼らは、彼（イエス）がゆりかごにいる時に言葉を発したということを語っていない。彼らはマリヤが、ダビデの子孫の一人であるヨセフ Yūsuf という男の許嫁であったこと、彼女が [75] 妊娠したということを語っている。

マリヤの出産が近付くと、ヨセフは彼女を連れてベツレヘムへ向かった。彼女が子どもを産む

<sup>23</sup> マスウーディーはヤアクービーと同様に天使ジブリール（ガブリエル）の到来をマリヤが17歳の時とする（al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 70）。一方タバリーはマリヤの身籠もりを13歳の時と伝えている（al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie I, p. 711）。

<sup>24</sup> 『クルアーン』19章17–21節では、聖霊がマリヤに「穢れない少年 ghulām zakīy」を与えるとされている。

<sup>25</sup> 『クルアーン』19章15節以降にある記述を指している。

<sup>26</sup> 『クルアーン』19章23節には、マリヤが陣痛に苦しんだ時に、小川と棗椰子がもたらされたことが語られている。

<sup>27</sup> 『クルアーン』19章29–33節においてイエスがゆりかごの中で語った言葉が示されており、そのほかに3章46節、5章110節でもその出来事が言及されている。

<sup>28</sup> ヘブライ語で「パンの家」を表わし、エルサレムの南方約9kmに位置する場所の名。ダヴィデとその一族の故郷とされる。そのため、後代、将来のメシアは第二のダヴィデとしてベツレヘムからやってくるという信仰が生まれた（E. Elliger + 山我哲雄「ベツレヘム」『旧約新約聖書大事典』）。

<sup>29</sup> シリア暦における第九月。シリア暦は春分から始まるので、現在の暦でいうと十二月に当たる。『『歴史』訳注（1）』p. 134参照。

<sup>30</sup> 『新約聖書』の四福音書にはイエスの誕生日の日付に関する情報はない。

<sup>31</sup> 8世紀後半から9世紀初めにかけて活躍したバスラ出身のユダヤ教徒の天文学者・占星術師。マンスールからマアムーンに至る初期のアッバース朝カリフに仕えた（J. Samsó, “MĀSHĀ' ALLĀH,” *EI*<sup>2</sup>）。

<sup>32</sup> 上昇点については『『歴史』訳注（1）』p. 145, n. 79を参照。

<sup>33</sup> マー・シャー・アッラーの『諸々の合と諸宗教と諸宗教共同体について *Kitāb fī al-Qirānāt wa al-Adyān wa al-Milal*』の現存する断片では、イエスの誕生年のホロスコープは、土星が磨羯宮の16度28分に、木星は逆行しており処女宮の2度30分に、火星は双児宮の21度22分に、太陽は白羊宮の1分に、金星は金牛宮の14度に、水星は白羊宮の4度59分に、月は双児宮の22度44分に、上昇点は天秤宮の18度にあったとされている（E. S. Kennedy and D. Pingree, *The Astrological History of Māshā'allāh*, Cambridge-Massachusetts: Harvard University Press, 1971, pp. 11, 47, 96–97）。



と、彼は彼女をガリラヤ<sup>XII 34</sup>の山のナザレNāṣira<sup>35</sup>に帰した。(子どもが産まれて)8日目になると、彼はアムラムの子モーセの慣習 sunna に従って割礼を施した。

(イエスの)使徒たち al-ḥawārīyūn はメシアの情報を叙述した。彼らは彼の状況を記した。我々は彼らのひとりひとりの記述と彼らがそれについて叙述していることを確認した。(イエスの)使徒たちはヤコブの諸支族からの12人であった<sup>36</sup>。バルザブダイ Barzabdi<sup>XIII</sup>支族のカナン Kan‘ānの子シモン Sham‘ūn、ゼブルン Ziblūn<sup>XIV</sup>支族のカーリー Qālī<sup>XV</sup>の子ハービル Ḥābirの子ヨハネ Yahyā、アシエル Asīr<sup>XVI</sup>支族のフィリッポス Fīlifūs<sup>XVII</sup>、ヤコブの子イッサカル Istaḥar<sup>XVIII</sup>支族のマタイ Mattā、ヤコブの子フラーム Furām<sup>XIX</sup>支族のサムイー Sam‘ī、ヤコブの子ユダ Yahūdā 支族のユダ、ヤコブの子ヨセフ Yūsuf 支族のヤコブ<sup>XX</sup> Ya‘qūb、ヤコブの子ルベン Rūbīl 支族のマンサー Mansā<sup>37 XXI</sup>であった<sup>38</sup>。これらの者たち以外に70人がいた。『福音書』を書いた4人は、マタイ Mattā、マルコ Marqus、ルカ Lūqā、ヨハネ Yūḥannā であった。2人は12人(十二使徒)に属しており、他の2人はそうではない。

マタイはというと、彼は『福音書』の中でアブラハムの子、ダヴィデの子、メシアたるイエス Īsū<sup>39</sup>の系譜<sup>XXII</sup>について、(アブラハムから)42人の父祖の後、マタンの子ヤコブの子ヨセフ Yūsuf

<sup>34</sup> ガリラヤは、ガリラヤ湖とそれを貫くヨルダン川を境に地中海沿岸まで広がるパレスチナ北部の地名。ヤークート『諸国集成』では al-Jalīl の項に、この名を持ついくつかの山が挙げられているが、その中のパレスチナの地にある「身籠もりの山 Jabal al-Ḥaml」がこのガリラヤに当たると考えられる (Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, 5 vols., Beirut: Dār al-Šādir, 2015, vol. 2, pp. 103–104)。

<sup>35</sup> ガリラヤ南部の山間部の町 (E.W. Saunders + 佐藤研「ナザレ」『旧約新約聖書大事典』)。

<sup>36</sup> 以下では、十二使徒の名と出身支族が挙げられているが、かなりの部分、意味不明な箇所があり、『新約聖書』「マルコによる福音書」3章16–19節や「使徒行伝」1章13節とかなりの異同がある。名前がどこで区分されているかについては、ひとまずマンチェスター写本を基準とし、一人ごとに原綴を示した。また名前の日本語への音写に関しては、これまで登場した人名に相当するものと考えられる場合は、以前現れた形で示し、そうでない場合はアラビア語を音写した。氏族名に関しては、ヤコブの息子としてこれ以前に登場しているものに相当する者は、それに準じて音写した。

<sup>37</sup> おそらくはマタイ Mattā の書き誤りであろう。

<sup>38</sup> タバリー『諸預言者と諸王の歴史』では、イエス死後の十二使徒の活動の記述に彼らの名前が登場するが、それによると彼らは Fuṭrus, Būlus, Andrāyīs, Mathā (あるいは Mattā), Tūmās Filibus, Yūḥannas, Ya‘qūbus, Ibn Talmā, Sīmun, Yahūdā とされている (al-Ṭabarī, *Ta‘rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie I, pp. 737–738)。ただし、ここでは11人しか挙げられていないため、Ya‘qūbus は Ya‘qūbayn 「二人のヤコブ」と読む可能性も考えられる。

また、タバリーのクルアーン注釈書『クルアーン章句解釈に関する解明集成』は、十二使徒を列挙し、Fuṭrus, Ya‘qūb b. Zabdī, Yūḥannas akhū Ya‘qūb, Andrāyīs, Filibbus, Abarathalmā, Mattā, Tūmās, Ya‘qūb b. Ḥalqāyā, Tuddāwusīs, Fatātiyā, Yūdus Zakariyā Yūṭā としている (al-Ṭabarī, *Jāmi‘ al-Bayān ‘an Ta‘wīl Āy al-Qur‘ān*, ed. ‘Abd Allāh b. ‘Abd al-Muḥsin al-Turkī, Cairo: Markaz al-Buḥūth wa Dirāsāt al-‘Arabīya wa al-Islāmīya bi-Dār Hajar, vol. 7, pp. 655–656)。

いずれの場合も、これらの使徒の支族名には言及が見当たらない。

なお、イエス死後の弟子たちの活動の記述の中にも十二使徒を列挙する部分があるため、そちらも参照されたい (L: I, 87)。

<sup>39</sup> 冒頭の見出し部分では、イエスの名は『クルアーン』にも現れ、以後アラビア語の名前として通常使われる ‘Īsā であったが、これ以降は Īsū が用いられる。

b. Ya‘qūb b. Māthanまで述べている<sup>40</sup>。その後彼は以下のように語っている。ヨセフはマリヤの夫<sup>XXIII</sup>であった<sup>41</sup>。メシアはパレスティナの村の一つベツレヘムに産まれた。その時パレスティナの王はヘロデHirūdis<sup>42</sup>であった。マゴス al-Majūs<sup>43</sup>の一団がベツレヘムにやってきたが、[76] その時、彼らの頭上に星があって、それによって彼らは導かれたのである。そして彼らはイエスを見て、彼に跪拝した<sup>44</sup>。パレスティナの王ヘロデはメシアを殺そうとした。それでヨセフは、イエスと彼の母をエジプトの地へと送り出した<sup>45</sup>。ヘロデが死ぬと、彼を戻し、ガリラヤ<sup>XXIV</sup>の山のナザレに住ませた<sup>46</sup>。

メシアが成人し、29歳<sup>47</sup>になったとき、彼は、弟子として選ばれるためにザカリヤの子ヨハネ Yahyā b. Zakariyā<sup>48</sup>のもとへ行った。するとザカリヤの子ヨハネは彼に言った。「あなたが私に対してそうであるよりも、私はあなたのことを必要としている aḥwaj」と<sup>XXV</sup>。メシアは彼に言った。「その言葉を捨てよ utruk。というのも、このように、正しいこと birrを成就することが必要なのだから」と<sup>49</sup>。それでヨハネはその言葉を捨てた taraka-hu<sup>50</sup>。

<sup>40</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」1章1-16節では、アブラハムから順に、イエスに至るまでの系譜を「AがBを生み、」という文を連ねて示している。『新約聖書』「マタイによる福音書」1章17節では、アブラハムからイエスまでの世代で42世代と記されている。「アブラハムの子」、「ダビデの子」という表現は、それぞれの父系の子孫であることを示しており、また「ダビデの子」は、称号として、待望されていた理想のメシアの象徴となる表現であった (S. Herrmann+石田友雄「ダビデ」『旧約新約聖書大事典』)。

ヨセフの系譜については、イブン・クタイバ『知識の書』は、系譜は詳述せず、ただダビデの子孫であることのみを記している (Ibn Qutayba, *al-Ma‘ārif*, p. 53)。マスウーディー『黄金の牧場』は単に大王ヨセフとして言及するのみである (al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, 71)。一方タバリー『諸預言者と諸王の歴史』は Yūsuf b. Ya‘qūb b. Māthan b. al-Yu‘āzār b. al-Yazdh b. Aḥn b. Šādūq b. ‘Āzūr b. al-Yāqīm b. Abūdūh b. Zarbābil b. Shaltīl b. Yūhannā b. Yūshiyā b. Amūn b. Manshā b. Hizqiyā b. Aḥāz b. Yūthām b. ‘Ūziyā b. Yūrām b. Yihūshāfāt b. Asā b. Abiyā b. Raḥba‘im b. Sulaymān b. Dāwūd と、ダビデにまで遡る系譜を伝え、またマルヤムのいとこであるとしている (al-Ṭabarī, *Ta‘rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie I, p. 712)。

<sup>41</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」1章18-24節に対応。

<sup>42</sup> ヘロデ1世。イドマヤ出身で生粋のユダヤ人ではないが、ハスモン家の女性と結婚した上で、ローマの支配のもとで前37年から前4年まで王としてパレスチナに君臨した (土岐健治「ヘロデ」『旧約新約聖書大事典』)。

<sup>43</sup> ギリシア語では magos (単数系。『新約聖書』「マタイによる福音書」では複数形 magoi が用いられている) であり、本来は古代イランにおける祭司階級を表すマグ magu に由来すると考えられている。ただし『新約聖書』「マタイによる福音書」では単に東方の知者というほどの意味であると解されている (山我哲雄「博士」『旧約新約聖書大事典』)。一方で、アラビア語の majūs は「博士」に類する意味では用いられておらず、広くゾロアスター教徒を意味する。ここでは一般に用いられているラテン語の複数形 magi の音に基づいて訳出した。

<sup>44</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」2章1-10節に対応。

<sup>45</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」2章13-14節に対応。

<sup>46</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」2章19-23節に対応。

<sup>47</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」には年齢についての記述はない。

<sup>48</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」にはこの箇所には父の名の記述はない。

<sup>49</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」3章15節「今はそうさせてほしい。このようにすべての義を満たすのは、私たちにとってふさわしいことだから」とされている。

<sup>50</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」3章13-15節に対応。それによると、この一段はヨハネによるイエスの浸礼 (洗礼) についてのものであり、ヨハネの発言は自分こそがイエスから浸礼を受けなくてはならないのだ、という趣旨である。ヤアクービーのテキストでは、これが浸礼に関するものだと触れられていない。

そしてイエス<sup>xxvi</sup>は神の霊の助けによって荒野へ出てゆき、40日間斎戒を行ったšāma<sup>xxvii</sup>。すると悪魔 shayṭān が彼に近付き、言った。「もしお前が今、神の子であるのならば、この小石にパンになるように命じてみよ<sup>xxviii</sup>」と。イエス<sup>xxix</sup>は言った。「人間はパンのみによって生きるのではなく、神の言葉によって生きるのである」と<sup>51</sup>。それで悪魔は彼を運んで、(エルサレムの神殿の)聖所の屋根の端 janāḥ al-haykal<sup>52</sup>へと送り、彼に言った。「それでは大地に身を投げてみせよ。もしお前が神の子ならば、神の天使たちがあなたを守るはずだ<sup>xxx</sup>」と。メシアは言った。「以下のように書かれている。『あなたは自ら神を試してはいけない』」と<sup>53</sup>。そして彼は悪魔に言った。「立ち去れ。そして私は<sup>xxxi</sup>神のために跪拜し、彼に僕として仕える」と<sup>54</sup>。すると悪魔は彼を残して去った。その後、神の天使たちが彼に集ってきて、仕え始めた<sup>55</sup>。

その後、彼の弟子たちが彼のもとに集ってきた。そこで彼は彼らに譬え amthāl と啓示 wahy で、また譬えではないものでもって語った。マタイの福音書にあるものによると、イエスが語った福音 injil の始まりは以下のようなものであった<sup>56</sup>。

「彼らの心が彼らの主のもとにあるものに満足している困窮者たちに幸いあれ tūbā<sup>xxxii</sup>。まことに天の王国は彼らのものである<sup>57</sup>。神への服従に飢え乾いているものたちに幸いあれ<sup>58</sup>。自らの言葉において正直であり、嘘を捨てるものたちに幸いあれ<sup>59</sup>。このようなものたちは、この大地の塩であ

<sup>51</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」p. 83, n. 4の注釈によると、『旧約聖書』「申命記」8章3節の文言「人はパンのみによって生きるのではなく、ヤハウェの口から出るすべてのものによって人は生きるものであることを、あなたに知らせるためであった」を踏まえたものとされる。

<sup>52</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」における原語 pterygion は「翼の形をしたもの、先端」を指す語で、アラビア語の janāḥ は直訳となっているが、いずれにせよ神殿のどの部分を指しているのかはよくわからない(『新約聖書』p. 83, n. 6参照)。

<sup>53</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」p. 83, n. 9の注釈によると、『七十人訳聖書』「申命記」6章16節の文言「おまえはおまえの神・主を試してはならない」を踏まえたものとされる。なお、ヘブライ語の『旧約聖書』の同箇所では二人称複数となっている。

<sup>54</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」4章1-10節の対応部分に付された注釈(p. 83, n. 10)によると、この部分は『旧約聖書』「申命記」6章13節の文言「あなたはあなたの神ヤハウェを畏れ、ヤハウェに仕え、その名によって誓わなければならない」を踏まえたものとされる。なお『新約聖書』「マタイによる福音書」4章10節では、「あなたは、あなたの神、主をこそ伏し拝み、彼のみには仕えよう」と、二人称の未来形としているが、マンチェスター写本の読みに従って一人称として訳とした。英訳も同様に一人称としている(E: 332)。

<sup>55</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」4章1-11節に対応(「ルカによる福音書」4章1-13節に並行箇所)。「マタイによる福音書」では、イエスの応答は、毎回「こう書かれている」ということを示す発言がなされているが、ヤアクービーのテキストでは「あなたは自ら神を試してはいけない」についてしか明示されていない。

<sup>56</sup> この一段は『新約聖書』の本文にない言葉でまとめられており、ヤアクービーによる挿入と考えられる。これ以下は、いわゆる「山上の説教」(「マタイによる福音書」5-7章、「ルカによる福音書」6章17-49節)のかなり不完全な抄訳である(V. Hasler+佐竹明「山上の説教」『旧約新約聖書大事典』)。

<sup>57</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章3節に対応。

<sup>58</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章6節に対応。

<sup>59</sup> この一節には対応箇所が見あたらない。

り、この世界の光である<sup>60</sup>。

誰も殺してはいけない。誰に対しても不満を持ってはならないiskhaṭū。あなたたちに不満を持つものたちを満足させよ。敵と和解せよ<sup>61</sup>。

姦通してはいけない<sup>62</sup>。あなたたちの妻以外を見てはならない。もし[77]あなたたちの右目<sup>xxxiii</sup>があなたたちを不信仰al-khiyānaへと誘うならば、それをえぐり出せ。そうすればあなたたちの体については安全である<sup>63</sup>。

姦通zanya以外の理由であなたたちの妻を離縁してはならない<sup>64</sup>。

正直にであっても、嘘偽りであっても、神にかけて誓ってはならない。神の天にかけても、神の地にかけても<sup>65</sup>。

危害を加えられてもそれに対抗してはならない。そうではなくて、あなたの右頬を叩く者については、その者に対して左頬を向けよ。あなたの肌着をはぎ取ろうとする者については、その者に外套も与えよ。1ミールmil<sup>66</sup>あなたを強いて行かせる者については、その者とともに2ミール行け。あなたに求める者については、その者に与えよ。あなたに借金を申し込む者については、その者に貸し与えよ。拒絶してはならない<sup>67</sup>。

あなたたちは既に、『あなたの隣人を愛せ。あなたの敵を憎め』<sup>68</sup>ということを知った。私はというと、あなたたちにあなたたちの敵を愛せと言う。あなたたちを疎外する者のために祈れ<sup>69</sup>。あなたたちが嫌う者に対して善をなせ。もし<sup>xxxiv</sup>あなたたちが、あなたたちを愛する者たちを愛したと

<sup>60</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章13-14節に対応。ただし聖書本文では冒頭の主語は「汝ら」。ヤアクービーの原文ではalladhīnaで前の文とつながられている。

<sup>61</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章21-26節に対応。なお、「誰も殺してはいけない」の部分は、「古の人々に言われたこと」と明言されており、『旧約聖書』「出エジプト記」20章13節および「申命記」5章17節に記された「十戒」の一部を踏まえたものである。

<sup>62</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章27節に対応。前注と同様に『旧約聖書』「出エジプト記」20章14節および「申命記」5章18節に記された「十戒」の一部を踏まえたものである。

<sup>63</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章29節に対応。

<sup>64</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章31-32節に対応。

<sup>65</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章33-35節に対応。

<sup>66</sup> ヒンツによると1ミールの長さは約2km (W. Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, Leiden: E. J. Brill, 1955, p. 63)。『新約聖書』「マタイによる福音書」では「ミリオンmillion」であり、ローマ式1マイルで、1千歩を意味し、約1480mであるとされる(『新約聖書』「マタイによる福音書」p. 89, n.12)。

<sup>67</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章38-42節に対応。ただし「その者に貸し与えよ」の部分は『新約聖書』本文テキストにはない。

<sup>68</sup> 『旧約聖書』「レビ記」19章18節からの引用。後段の「あなたの敵を憎め」については、『旧約聖書』には該当する文言はないが、クムラン教団の文書に同種の言葉があるという(『新約聖書』「マタイによる福音書」p. 89, n. 14)。

<sup>69</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章44節では「祈れ」の意となっている。刊本ではwa-ṣilūと発音符号が付されており、waṣalaの命令形「着け、繋かれ」として読めるが、両写本にはそのようなシャクルはない(M: 15b; C 20b)。本来ならば前置詞'alāがあるのが望ましいが、ここではṣallūで「祈れ」と読んだ。



しても、いかなる<sup>xxxv</sup>報酬が、あなたたちにあるというのか<sup>70</sup>。

あなたたちの施し<sup>ṣadaqāt</sup>を人々の前であらわにするな。あなたたちの右手が行ったことについて、あなたたちの左手に知らせるな<sup>71</sup>。

人々にあなたたちの礼拝を見せるな。礼拝をする時は、あなたたちの家に入り、あなたたちの門を施錠せよ<sup>72</sup>。誰にもあなたたちのことを聞かせてはならない。礼拝をする時は、以下のように言え。『天にいる我が父<sup>xxxvi</sup>よ、あなたの名前は聖なるものとされ、あなたの天国が到来する。あなたの望み<sup>xxxvii</sup>が、天にてそうであるように、また地上にてそうであるように、成るだろう。我々に糧を与えよ。我々に今日与えよ。我々の負債を赦せ<sup>taraka</sup>。我々に負債を負っている者たち<sup>ghuramā'</sup>を我々が赦したように。我々に試練をもたすな。おお主よ。そうではなくて、メシアである我が主イエスによって<sup>xxxviii</sup>、我々を悪<sup>shirrīr</sup>から救え』<sup>73</sup>。

あなたたちの主である神のために齋戒を行う時は、それを人々にあらわにするな。人々にあなたたちを見せるために、あなたたちの顔を（苦しげに）変えるな。というのも、あなたたちの主は、あなたたちの状況を知っているのだから<sup>74</sup>。

衣魚<sup>し</sup><sup>sūs</sup>と貪る白蟻<sup>arāḍa</sup>が蝕むところや、盗人が掘りだす<sup>xxxix</sup>ようなところに、財宝を入れるな。そうではなくて、あなたたちの財宝はあなたたちの主のもとに置くのだ。主は天におり、そこは害をなす衣魚も盗みをなす盗人もいないところである<sup>75</sup>。

[78] あなたたちの日々の糧<sup>xl</sup>について心配するな。あなたたちが食べるものにも、飲むものにも、着るものにも<sup>xli</sup><sup>76</sup>。

天の鳥を見よ。耕さず、刈り取らず、家に集めることもしないが、神は糧を与えるのである。そして、あなたたちは鳥よりも優れているのだ<sup>77</sup>。

あなたたちの子供たちについて心配するな。まことに彼らはあなたたちのようである。あなたたちが創造されたように、彼らも創造され、あなたたちが糧を与えられたように、彼らも糧を与えられたのである。

あなたの目の中に梁があるのに、あなたの兄弟に『あなたの目から塵を取り除け』<sup>78</sup>と言うな。

<sup>70</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」5章43-48節に対応。

<sup>71</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章1-3節に対応。「最も近い者たちにも、知らせるには及ばない、の意」とであるという（『新約聖書』「マタイによる福音書」p. 91, n. 5）。

<sup>72</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章5-6節に対応。

<sup>73</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章9-13節に対応。

<sup>74</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章16-18節に対応。

<sup>75</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章19-21節に対応。

<sup>76</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章25節に対応。

<sup>77</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」6章26節に対応。

<sup>78</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章4節では「君の目からそのちり屑を取り出させてくれ」とされる。ヤアクービーのテキストでも、一人称で「私はあなたの目から塵を取り除こう」と訳すことも可能ではあるが、文脈上命令形で訳出した。

人々の過ちを見るな。あなたたち自身の過ちをあなたたちはそのままにしているのに<sup>79</sup>。

豚に神聖なもの<sup>XLII</sup>や真珠を与えるな。それらはそれを足で踏みつぶすだろう<sup>80</sup>。

あなたたちの主が<sup>XLIII</sup>あなたたちに与えよう<sup>XLIV</sup>。彼に対して求めよ。彼があなたたちに対して慈悲深き者であることをあなたたちは知るであろう。彼の門を叩け。そうすればあなたたちに対して開かれるだろう<sup>81</sup>。その門はというと広く、道は明らかである。それは人々を滅びに導く。その門のなんと小さいことか。道のなんと狭いことか。それこそが<sup>XLV</sup>人々を救いに導く<sup>XLVI</sup>のだ<sup>82</sup>。

獐猛な狼に似た嘘つきども<sup>83</sup>を警戒せよ。茨の中から葡萄を選び取る<sup>XLVII</sup>ことも、コロシントウリ ḥanzal の中からイチジクを選び取ることもあなたたちにはできない<sup>XLVIII</sup>。また同様に、良い植物を発生させる悪い木をあなたたちは見つけることはないし、悪い果実を生み出す良い木もまた見つけることはないだろう<sup>84</sup>。

私の言葉を聞き、理解する者は皆、ひどく固い場所に自分の家を建てた忍耐強い ḥalīm<sup>85</sup> 人間と似ている。雨が降り、川は増水し、風は強まり、そして家は倒れたのであった<sup>86</sup>。」

その時代にヘロデ<sup>XLIX</sup>王はヨハネ Yūḥannā を捕え、投獄した<sup>87</sup>。それは、以下のようなことである。

<sup>79</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章1-5節に対応。

<sup>80</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章6節に対応。前段は、『新約聖書』では「聖なるものを犬どもにやるな」となっているが、ヤアクービーのテキストでは犬は言及されず、神聖なものや真珠の両者を豚に与えてはいけないとされている。

<sup>81</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章7-8節に対応。

<sup>82</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章13-14節に対応。ヤアクービーのテキストでは、門については定冠詞付きの al-bāb が二度登場し、別のものであるか判別が難しい。また、『新約聖書』での、広い門を通る人は多く、狭い門を見出す人は少ない、という部分は、ヤアクービーのテキストでは示されていない。

<sup>83</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章15節では「偽預言者」とされている。

<sup>84</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章15-18節に対応。ただし、『新約聖書』では、羊の衣を着ていながら、内面が狼であるとされている。

<sup>85</sup> 英訳の注釈では、『ペシッタ』を参照しつつ、ḥalīm ではなく ḥakīm 「賢い」と読む可能性を提示している (E: 334, n. 308)。

<sup>86</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」7章24-27節に対応。写本には空白はないが、刊本では聖書にある記述を元に空白を追加している。24-27節の刊本で空白とされているのは以下で斜体とした部分である。「だから、これらの私の言葉を聞いてそれらを行うすべての者は、自分の家を岩の上に建てた賢い人と同じであると言えよう。雨が降り、大洪水が押し寄せ、暴風が吹いてその家に襲いかかった。しかし家は崩れなかった。岩の上に礎を据えていたからである。しかし、これらの私の言葉を聞いてもそれらを行わないすべての者は、自分の家を砂の上に建てた愚かな人と同じであると言えよう。雨が降り、大洪水が押し寄せ、暴風が吹いてその家を襲った。すると家は崩れた。そしてその崩れは、はなはだしかった。」英訳では、下線を付した脱落部分の冒頭と脱落部分の直後の文章の類似から、書写において脱落が起こったと考えている (E: 334, n. 309)。

<sup>87</sup> イエス誕生時に王であったヘロデではなく、その息子ヘロデ・アンティパスのこと。ヤアクービーは王 malik としているが、『新約聖書』「マタイによる福音書」14章1節では、王ではなく、「四分封領主 tetraarxēs」とされている。ただし、「マルコによる福音書」6章14節では「ヘロデ王 Basileus」とされている。「ルカによる福音書」9章7節では「マタイによる福音書」と同様に「四分封領主」とされている。『ペシッタ』「マタイによる福音書」14章1節でも「四分封領主 tetarkāt」とされている。

ヘロデ王が彼の兄弟フィリッポス Filufūs の妻<sup>88</sup>のもとにやってくるが、ヨハネは彼にそうしてやってくることは禁じられていると言った。そこでヘロデ王はヨハネを殺そうと思った。というのも、人々がヨハネを偉大な者とみなしていたのでそれを恐れたからである。彼の兄弟の妻が、彼に「ヨハネを殺せ」と言った<sup>89</sup>。それでヘロデ王は牢獄に送り、ヨハネの首を切り、[79] 盆の上に置いた。彼の弟子たち talāmīdh が近付いていって、彼の亡骸を引き取り、埋葬した。彼らはメシアのもとに来て<sup>90</sup>、彼に知らせた。それで彼は荒野に出た。彼の弟子たち aṣhāb に「誰にも知らせるな」と命じ始めた<sup>90</sup>。

### マルコの福音書

マルコはというと、彼の福音書の初めに、以下のように言っている。

神の子であるメシアたるイエス Īsū<sup>91</sup>。預言者イザヤ Ish‘īyā<sup>92</sup> の書に書かれているように、「私はあなたの面前に天使<sup>93</sup>を遣わした者である。あなたの道をよいものとするために」と<sup>94</sup>。ザカリヤの子ヨハネは、悔い改め tawba のための洗礼<sup>94</sup>を行っていた。彼の服はラクダの毛皮であった。そし

<sup>88</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」14章3節ではヘロディアと名前が示されている。

<sup>89</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」14章6-8節では、ヘロディアの娘が、ヘロディアに唆されてヘロデ・アンティパスに、ヨハネの殺害を願い出たとされる。

なお、ヘロディアの娘は一般にサロメの名で知られているが、これは『新約聖書』「マタイによる福音書」では言及されず、ヨセフス『ユダヤ古代誌』では、ヘロディアとフィリッポスとの娘としてサロメという名で言及されている（フラウィウス・ヨセフス著、秦剛平訳『ユダヤ古代誌 6』（筑摩書房、2000年）p. 55）。「マタイによる福音書」と同様に、ヤアクービーのテキストにはその名は登場しない。

<sup>90</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」14章1-13節に対応。ただし最後の一文における出典、また何を知らせてはいけなかったかは明らかではない。「マタイによる福音書」16章20節には「自分がキリストであることを誰にも話さないように、弟子たちに命令した」という文言が、また17章9節には「人の子が死人たちの中から起こされるまでは、目にしたことを誰にも言うな」という台詞がある。

この一段はかなり事態の経緯が省略されており、『新約聖書』の内容を把握していない者がヤアクービーのテキストを読んだだけで理解できたかは疑わしいが、ヨハネとイエスの連続性が強調されていると考えられ、のちに語られるイエスの死に直接つながる逸話として語られているように思われる。

<sup>91</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章1節には「神の子イエス・キリストの福音の源」とあり、直前の文にある Ijnīl-hu の hu がなければそう読むことが可能であろう。しかし、後述の「ルカによる福音書」部分の冒頭の書き方を踏まえると、直前の文とは分けて訳すのが適当と考えられる。

<sup>92</sup> ユダ王国の王ウジヤフの死んだ紀元前735年に召命を受けたとされる預言者。ヤアクービーの『歴史』でも、預言者としてウジヤフに関連して言及されているほか（L: I, 68）、『旧約聖書』には記載のない逸話であるマナセが彼を殺害した記述もあることも伝えられている（L: I, 69-70）。

<sup>93</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章2節では「私の使者」となっている。

<sup>94</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章2節に対応。ただし『新約聖書』の当該部分の前半で、ヤアクービーのテキストに含まれている部分は『旧約聖書』「出エジプト記」23章27節と「マラキ書」3章1節の混合引用となっており、実際に「イザヤ書」が引用されている後半部分（「荒野で呼ばれる者の声、『お前たち、主の道を備えよ。彼の小径を直くせよ』」）は、ヤアクービーのテキストには含まれていない（『新約聖書』「マルコによる福音書」p. 3, n. 3参照）。

て革紐 ghurfa を腰<sup>LII</sup>に結びつけていた<sup>95</sup>。メシアがガリラヤのナザレ Nāṣira al-Jalīl<sup>LIII</sup>から彼のもとを訪れると、ヨハネは彼にヨルダン（川）にて洗礼を施した。ヨハネが彼に洗礼を施すと、聖霊 rūḥ al-quḍṣ が水の上に鳩のようにやってきた。そして天から声が<sup>LIV</sup>響いてきた。「あなたは我が息子、我が愛する者。あなたによって私が喜ぶ者」と<sup>96</sup>。

そして彼はガリラヤ<sup>LV</sup>の山<sup>97</sup>へ向かった。人々が漁をしており、彼らの中にはシモン Shim‘ūn<sup>98</sup>とアンドレアス Andurā‘us がいた。イエスはその二人に言った。「二人とも私についてきなさい。私は、あなたたち二人に、人間を取る漁をさせよう」と。二人は彼とともに行った<sup>99</sup>。その後彼はある村に入った。彼はそこの病人と白癩の者を癒した<sup>100</sup>。またそこで盲人の目を開いた<sup>101</sup>。それで人々は彼のもとへと集まった。彼は彼らに譬えと啓示 wahy をもって説き始めた<sup>102</sup>。また彼は言う。「真実にかけて bi-haqq<sup>in</sup> 私はあなたたちに言う。一族 al-qabīla<sup>103</sup>は過ぎゆくことはない。天と地は過ぎゆくだろう。私の言葉が過ぎゆくことはない」と<sup>104</sup>。

#### ルカの福音書

ルカはというと、彼は福音書の初めに以下のように言っている。

多くの人々は、我々が知っている物語や出来事を書くことを好むため、私（ルカ）にとっても、確かにそうであると私が知っていることについて書くべきであると、私は考えた<sup>LVI</sup>。

ヘロデ王の時代に、ザカリヤと呼ばれる祭司がいた。彼はアビヤ<sup>LVII</sup>の一族の従者の一人であった。彼の妻はアロン<sup>105</sup>の子孫で、エリザベト Alyasba<sup>LVIII</sup>といった。二人とも、神の前で敬虔な者であり、神の指示によって行動する者であり、神に従うことをおろそかにしない者であった。二人には子供がなかった。エリザベト<sup>LIX</sup>は [80] 不妊で、ザカリヤも不妊であった。二人は既に年老いていた<sup>106</sup>。

<sup>95</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章4–6節に対応。

<sup>96</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章9–11節に対応。

<sup>97</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章16節では「ガリラヤの海辺」すなわちガリラヤ湖とされている。

<sup>98</sup> 使徒の一人ペトロのこと。注158も参照のこと。

<sup>99</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章16–17節に対応。

<sup>100</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」1章29–42節にこれに関連する記述がある。

<sup>101</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」8章22–26節および10章46–52節に盲人の目を見えるようにしたことが記されている。ただし前者はベトサイダ、後者はエリコでの逸話である。

<sup>102</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」3章23節から4章34節までには、譬えを用いたイエスの言葉が連続して記述されている。

<sup>103</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」ではギリシア語 genea であり、人々、世代、一族のような意味となる。英訳では一族と訳した上で、注釈にて、ギリシャ語の genea がシリア語の sharbtā に訳され、これが人種や一族という意味を持っていたためにアラビア語の qabīla という訳語が当てられたと説明している (E: 334, n. 311)。

<sup>104</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」13章30–31節に対応。

<sup>105</sup> アロンの子孫であることは、エルサレム神殿の祭司の家系に属することを意味した (K. Koch+月本昭男「アロンの子ら」『旧約新約聖書大事典』)。アロンについては『歴史』訳注 (2) p. 135以降も参照せよ。

<sup>106</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章5–7節に対応。



ザカリヤが香を焚いて祭司の務めを行おうと、聖所 haykal に入った。このとき人々<sup>LX</sup>は聖所の外にいた。すると主の天使が、ザカリヤのもとに現れ、祭壇の右手に立った。ザカリヤはそれを見て身震いをし、恐れが彼に降り掛かった。天使が彼に言った。「恐れるな<sup>LXI</sup>、ザカリヤよ。まことに神はあなたの祈りを聴き、あなたの願いに応えたもう。彼はあなたがヨハネと名付けることになる一人の子を授けるだろう。彼はあなたにとって善きこと khayr と喜び<sup>LXII</sup>となるであろうし、彼は神のもとで大いなる者となる。彼は、葡萄酒 khamr も酒 sakar も飲まない。彼は、彼の母の体の中にいるときには、聖霊で満たされている<sup>LXIII</sup>。彼は、イスラエルの一族の多くの者とともに、神のもとへと向かう。また、父祖たちの心を彼らの子孫たちに向かわせるために、彼のもとに預言者<sup>LXIV</sup> エリヤ Ilyā'<sup>LXV</sup> 107 に降りた霊が降りるだろう。それで、彼らは神のために完全なる民<sup>LXVI</sup>となる<sup>LXVII</sup>」と。それでザカリヤは天使に言った。「どのようにして私が<sup>LXVIII</sup>このことを知ることができるでしょうか。私は老人 shaykh で、妻は高齢です」と。天使が彼に言った。「私はガブリエル Jibrīl<sup>108</sup>だ。神の御前に立つ者である。神がこのことをあなたに知らせるために私を遣わしたのである。今から、このことが成るその日まで、沈黙し、しゃべってはいけない。というのも、あなたは信用しなかったからである。その時に達成されることになる私の言葉を、信じなかったのだ」と<sup>109</sup>。

人々は立って、ザカリヤを待っており、聖所<sup>LXIX</sup>の中に彼が留まっていることを訝しんでいた。彼が出てきたとき、彼らに語ることはできなかった。彼らは、彼が聖所の中で幻を見たのだと知り、そのことを確信した。彼は彼らに身振りで示し、語らなかった。彼の務めの日々が終わって、家に戻ると、彼の妻であるエリザベト<sup>LXX</sup>は身ごもっていた。5ヶ月の間こもり続けた。彼女は言っていた。「これは主が、私に目をかけた日々に、人々の中にある私の恥 'ārī をぬぐい去るために<sup>LXXI</sup>なしたことである。」と<sup>110</sup>。

ザカリヤの妻の妊娠から6ヶ月目に、ガリラヤ<sup>LXXII</sup>の山の方、ナザレと呼ばれる町へ、[81] ダビデの一族の一人であるヨセフという男と婚約している乙女マリヤ<sup>111</sup>のもとへ、神が天使ガブリエルを遣わした。天使は彼女のもとへ来て、彼女に言った。「あなたに平安あれ。恩恵に満たされた者よ、女性たち<sup>LXXIII</sup>の中でも祝福された者よ」と。彼女が天使を見た時、その言葉を恐れて熟慮しはじめ、そして言った<sup>112</sup>。「その挨拶はどういうことですか」と。すると天使は彼女に言った<sup>LXXIV</sup>。「恐れるな、マリヤよ。すでにあなたは神のもとで恩恵に出会い、それに達した<sup>LXXV</sup>。確かに bi-

<sup>107</sup> エリヤは古代イスラエルの預言者。イスラエル王国のアハブ王と王妃イゼベルのバアル崇拜振興を批判した (H. Wildberger+木田献一「エリヤ」『旧約新約聖書大事典』)。

<sup>108</sup> 『旧約聖書』『新約聖書』『クルアーン』のそれぞれに共通して登場する天使。イスラームの文脈ではムハンマドに最初の啓示を告げたことで知られる。なお、すでに『「歴史」訳注(1)』p. 139, 『「歴史」訳注(2)』p. 119において登場し、ジブリールと音写されているが、ここでは『新約聖書』の表記に従ってガブリエルと訳出した。

<sup>109</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章8-20節に対応。

<sup>110</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章21-25節に対応。

<sup>111</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章27節では、ヘブライ語風にマリヤムと音写されているが、アラビア語では Maryam に変化はないため、これまでと同様にマリヤとした。

<sup>112</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章29節ではマリアが「言った」という記述はない。

haqq<sup>in LXXVI</sup> あなたは身籠って、一人の子を産む者である。あなたは彼をイエス Isū<sup>LXXVII</sup> と名付けるだろう<sup>LXXVIII</sup>。彼は偉大な者であり、高き者の子であると呼ばれるだろう。彼の神 ilāh-hu である主が、彼に彼の父祖であるダビデの玉座を与える。彼は終末の時までヤコブの一族の王となり、彼の王権が消えることはなく、断絶することもない」と。マリヤは天使に言った。「どのようにしてそのようなことがあるのでしょうか。一人の男も私に触れたことがないのに」と。天使は彼女に言った。「聖霊があなたに降りてくる。あなたから生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれるだろう。それなるエリサベトは、あなたの姻戚であるが、彼女もまた、高齢でありながら息子を身籠もっている。今月は不妊と呼ばれていたその者にとって6ヶ月目である。というのも、神にはできないことはないからである」と。マリヤは言った。「まことに私は神の<sup>はしため</sup>姻戚 ama である。私にあなたが言ったようなことがあるだろう」と<sup>113</sup>。

マリヤはザカリヤの家に入り、エリサベトに挨拶した。ザカリヤの妻がマリヤの言葉を聞くと、彼女の腹の中で胎児が動いて、彼女は聖霊に満たされた。そして彼女はマリヤに言った。「あなたは、女性たちの中でも祝福された者である。確かに bi-haqq<sup>in</sup>、私の耳にあなたの挨拶が届いたとき、大きな喜び<sup>LXXIX</sup>とともに私の腹の中で胎児が動いたのだ」と<sup>114</sup>。

そしてザカリヤの妻エリザベトは男児を生み、8日目に彼に割礼を施し、ヨハネと名付けた。すぐに彼の口が開いて話し始め、神を祝福した<sup>115</sup>。

ザカリヤは聖霊に満たされて言った。「主であるイスラエルの神 ilāh Isrā'īl に祝福あれ。彼は彼の民 sha'b に試練を与え、彼らを救済でもって解放し、ダビデの一族の中から救済の角<sup>116</sup>を我々のために立てた。清浄なる預言者たちの口を通して語った者のように」と<sup>117</sup>。

マリヤの [82] 身籠もりの月日が満ちると、ヨセフが彼女を連れてガリラヤ山に登っていった。そして彼女は初子の男児を生んだ。彼女は彼を布切れで包み、家畜の飼料桶の中に寝かせた。彼女には二人で身を落ち着ける場所がなかったからである<sup>LXXX 118</sup>。

すると主の天使が彼らのもとに来て、神の栄光が彼らのまわりを照らした<sup>LXXXI</sup>。彼らは強く恐れた。主の天使は彼らに言った。「恐れるな。悲しむな。間違いなく bi-haqq<sup>in</sup> 私はあなたがたに世界に広がる大きな喜びを伝える」と<sup>119</sup>。

<sup>113</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章26-38節に対応。

<sup>114</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章39-45節に対応。

<sup>115</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章57-64節に対応。

<sup>116</sup> 角は力を象徴する意味で用いられ、『七十人訳聖書』「詩編」17章3節および「サムエル記下」22章3節に「我が救いの角」という表現が登場する。その後、イスラエル民族の将来の大いなる繁栄をもたらすメシアの象徴となったとされる(田川健三訳著『新約聖書 訳と註 2上 ルカ福音書』(作品社、2011)、pp. 113-114)。

<sup>117</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」1章67-70節に対応。

<sup>118</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」2章4-7節に対応。刊本では脱落があるとみなし、空白を挿入している。脱落とされる部分は2章8節「さて、その地方には、羊飼いたちが野宿をしながら、自分たちの羊の群を夜もすがら見張っていた」であり、この後に続く文章の彼らはこの羊飼いたちということになっている。

<sup>119</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」2章9-10節に対応。

ところで、(ルカは)メシアについてヨセフからアダムまでの系譜を記している<sup>120</sup>。

8日経つと、モーセの慣習 *sunna* のごとく割礼を行うために彼を連れて行った。彼らは彼をイエスと名付けて、割礼を行った。彼らは彼を連れて神殿に行った。彼の捧げものとするために犠牲獣を持って行ったが<sup>LXXXII</sup>、それは野鳩<sup>LXXXIII</sup>のつがいと二羽の鳩の雛鳥であった<sup>121</sup>。そこには一人の男がいた。彼の名はシメオン *Sham‘ān*<sup>122</sup>で、預言者の一人であった。彼らが彼の捧げ物をするために祭壇に近付いた時、シメオンが彼を抱き上げて言った。「主よ、私はあなたの愛を私の両目で見た<sup>LXXXIV</sup>。今こそ私を召されよ」と<sup>123</sup>。

彼(イエス)の一族は毎年過越祭 *‘īd al-Fish* の時には彼を連れてエルサレムへと登った。彼は偉大な者たち *‘uẓamā’*<sup>124</sup>に仕えたが、彼らは、自分たちの見た彼の知恵のために、彼について<sup>LXXXV</sup>驚いた<sup>125</sup>。

メシアは30歳になると<sup>126</sup>、土曜日に神殿 *haykal* に入って、いつものように朗読するために立った。すると、預言者イザヤの書が与えられた。彼が書を開くと、そこに以下のように書かれているのを見つけた。「主の霊が私の上にある。そのために彼は私を選んで、油を注いだ<sup>LXXXVI</sup>。貧しい者たちに福音を知らせるためである。彼は私を遣わした。壊された彼らの心を癒すためである。また、捕えられた者たち<sup>LXXXVII</sup>に救済を知らせた。盲目の者たちに見ることを知らせるためである。まことに私は、壊されたものを元に戻し、捕えられた者<sup>LXXXVIII</sup>に慈悲と赦しを知らせる。まことに私は、主を受け入れる年について知らせる」と。彼は書を巻いて、それを従者に渡し、退がって行って *tanahhā*<sup>LXXXIX</sup>、座った。人々は彼のしたことに驚いて言った。「これはヨセフの息子ではないのか」と<sup>127</sup>。

<sup>120</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」3章23–38節に対応。そこでは祖先の名をアダムに至るまで(最後は神まで)辿っている。系譜の記述がなぜここに挿入されているかは不明。

<sup>121</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」2章22–24節に対応。ただしそこでは「山鳩の一つがい、あるいは家鳩の雛二羽」と選言になっている。

田川によると、ユダヤ教の律法によれば母親が初子の出産の穢れを清めてもらうための捧げ物であり、本来は子羊一頭だが、貧しいもののためにもうけられた例外規定であるという。ただし、本来ここで意図されているのは、生まれた子どもを一旦神に捧げた上で贖うという儀礼であり、それは銀貨5枚であって、「ルカによる福音書」においてはそれらが混同されているという(田川健三訳著『新約聖書 訳と註 2上 ルカ福音書』pp. 137–138)。

<sup>122</sup> この人物についてはこの箇所だけに登場する人物であり、後に出てくるアラビア語テキスト上では *Sham‘ān* と同名となる人物(シモン=ペトロ、注158参照)とは別人である。

<sup>123</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」2章25–30節に対応。

<sup>124</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」2章46節では「教師」。

<sup>125</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」2章41–46節に対応。ただし『新約聖書』にあるこの間の経緯説明は、ヤアクービーのテキストからは完全に省かれている。

<sup>126</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」3章23節に対応。ヤアクービーのテキストではつながっているが、「ルカによる福音書」では、年齢についての言及は系譜の記述の直前に置かれている。

<sup>127</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」4章16–22節に対応。

[83] ヨハネ<sup>XC</sup>の福音書

使徒 al-salīh<sup>XCI</sup> ヨハネはというと、彼の福音書の初めにメシアの由来について言っている。あらゆるものより前に言葉 kalima があった。その言葉は神とともにあった。神はすなわち言葉であった。それはあらゆるものより前にあるものであった。それによって命が生じた。その命は人類の光である。その輝きは闇の中にある。それ（闇）は<sup>XCII</sup> それを捉えなかった<sup>128</sup>。

神が彼を遣わした<sup>XCIII</sup>。彼の名はヨハネであった。彼は証言する shahāda ために<sup>XCIV</sup> 来た。それは、彼の手で人々が導かれ<sup>129</sup>、信仰するように、光について証言するためであった。彼は光ではなかった。まことに真理の光は世界の中でずっと輝き続け、明るくし続ける<sup>130</sup>。

それ（世界）は<sup>XCV</sup> 彼の手の中にあったが<sup>131</sup>、世界は彼を認識しなかった。彼は彼が属する人々のところに ilā khāṣṣat-hu 来たが、彼が属する人々 khāṣṣat-hu は彼を受け入れなかった<sup>XCVI</sup>。彼を受け入れて彼を信じた<sup>XCVII</sup> 者たちについては、神が彼らに神の子どもたちと呼ばれる権能 sultān を与えた。それらは彼の諸々の名<sup>XCVIII</sup>を信じる者たちである。彼は、血からでも、肉（なる人）の愛からでも、男の欲から生まれた<sup>XCIX</sup> 者でもない。そうではなくて神から生まれた者<sup>C</sup>である<sup>132</sup>。

言葉は<sup>CI</sup>肉（なる人）となって、私たちの中に住んだ。私たちはその栄光を見た<sup>CII</sup>。恩恵と正義で満たされた、父の一人子としての栄光を<sup>133</sup>。

ヨハネは彼について証言し、叫んで言った。「この者について、私は言った。『彼は私の後に来る。というのも、彼は私の前に来たからである。それは彼が私より古い<sup>CIII</sup>ものだからである』と<sup>134</sup>。完全に彼の充満の中から min tamām<sup>i</sup>-hi kamālat<sup>an</sup> <sup>CIV</sup>、私たちは皆<sup>CV</sup>、最初の恩恵にかわる良き恩恵を得た<sup>CVI</sup>。『律法』はムーサーの手に下され、真実と恩恵は、メシアであるイエスによるものである

<sup>128</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章1-5節に対応。両写本では闇が主語として現れておらず、闇を主語とするような文法的解釈は難しいが、『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章5節では、闇が主語として明示されているため、それにのっとってそれを闇として訳出した。また adraḳa 「捉えなかった」については「ヨハネによる福音書」1章5節では「阻止できなかった」としている。『ペシッタ』「ヨハネによる福音書」1章5節でも aderke-h となっており、ヤアクービーのテキストもこれを踏襲したものか。

<sup>129</sup> 英訳の注釈では li-yahtadiya al-nās 「人々が導かれ」の部分『クルアーン』に特徴的なフレーズであり、『新約聖書』ではなく、ヤアクービーによる挿入であると指摘している (E: 339, n. 323)。

<sup>130</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章6-9節に対応。

<sup>131</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章10節では、「世は彼を介してできたが」とされていることにのっとって、主語は「世界」を指すものと解釈した。英訳の注釈ではシリア語聖書を介したことによって意味のズレが生じたと指摘している (E: 339, n. 324)。また、この段落での「彼」は、「光」であるところの「言葉」であって、後段にあるようにイエス・キリストを指している。

<sup>132</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章10-13節に対応。

<sup>133</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章14節に対応。

<sup>134</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章15節では「自分の後から来ようとしている人は、私より優れたものとされている。私よりも先にいたから」とされている。ヤアクービーのテキストでは、やや重複感は否めないが、自分の後に現れたイエスが、実際にはより古い者であることから優れた者であることを表現しようとしたものか。



る<sup>CVII</sup>。父<sup>CVIII</sup>の胸の中にずっとある言葉<sup>135</sup>。

以上は、メシアの由来についての福音書の著者 aṣḥāb である4人の弟子 talāmīdh の言葉である。

彼らはその後メシアの話を書いている。彼は病人や癩病を患った者を癒し<sup>136</sup>、足の萎えた者を立たせ<sup>137</sup>、盲人の目を開いた<sup>138</sup>。

また彼には、[84] エルサレム地域 nāḥiya のベタニア Bayt ‘Anyā<sup>CIX 139</sup> と呼ばれる村に、ラザロ Al‘āzar<sup>CX</sup> という友人 ṣāḥib がいた。彼が死ぬと洞窟に運ばれ、4日間そのままであった。メシアがその村に来ると、ラザロ<sup>CXI</sup> の姉妹二人が出てきて、彼に「我々の主よ。あなたの古い友 khalīl であるラザロ<sup>CXII</sup> は死んだ」と言った。メシアは彼について悲しんで言った。「彼の墓はどこか」と。人々はメシアを連れて洞窟へと行った。その前には岩 ḥajar があった。彼は言った。「岩を除けよ」と。彼らは言った。「彼は4日経って腐ってしまいました」と。すると彼は洞窟に近付いて、言った。「主よ、あなたに讃えあれ。まことに、あなたがすべてのものを与えることを私は知っています。しかし、私は立ち止まっている人々のために、あなたが私を遣わしたのだということを彼らが信じるように言うのです」と。彼はラザロ<sup>CXIII</sup> に言った。「立て」と。すると彼は覆い khimār をかけられたままで、彼の両手両足<sup>CXIV</sup> は固く結ばれていた<sup>CXV</sup> が<sup>140</sup>、立ち上がった<sup>141</sup>。

彼らとともにユダヤ教徒 al-Yahūd がいた<sup>CXVI</sup> が、彼を信じた。というのも彼らはラザロ<sup>CXVII</sup> を見て、驚くようになったからである。そこでユダヤ教徒の有力者たち ‘uḏamā’ や祭司たち aḥbār が集まって、言った。「私たちの宗教が腐ってしまい、人々がイエスに従うことを私たちは恐れています」と。祭司たちの長 ra’īs al-kahana であるカヤファ Qayāfā<sup>142</sup> が彼らに言った。「まったくもって、

<sup>135</sup> 『新約聖書』『ヨハネによる福音書』1章15–18節に対応。なおヤアクービーのテキストで al-kalima 「言葉」とされている部分については、「ヨハネによる福音書」1章18節では「ひとり子なる神」となっている。

<sup>136</sup> 『新約聖書』『マタイによる福音書』8章1–4節では、イエスが癩病を患った者を清めている。また「マルコによる福音書」2章3–12節では中風患者がイエスによって癒やされている。

<sup>137</sup> 『新約聖書』『ヨハネによる福音書』5章1–9節では、エルサレム門外のベトザタの池の回廊に「病んでいる人々、目の見えない人々、足の不自由な人々、痩せ衰えた人々などが大勢臥せっていた」とあり、そのうちの一人をイエスが癒したとされる。また、「マタイによる福音書」15章30–31節では、「足の萎えた者たち、盲人たち、体の曲がった者たち、口の利けない者たち」などを癒したことが記されている。

<sup>138</sup> 『新約聖書』『ヨハネによる福音書』9章に盲人の目を見えるようにしたとの逸話がある。また、「マルコによる福音書」8章22–25節ではイエスが一人の盲人を癒している。

<sup>139</sup> ベタニアはオリーブ山の東山麓、エルサレムから3km弱離れた村。エリコからエルサレムに上る途上にあった (K. Elliger+山我哲雄「ベタニヤ」『旧約新約聖書大事典』)。

<sup>140</sup> 『新約聖書』『ヨハネによる福音書』11章43節では「死者は、両足、両手を包帯で巻かれたまま出て来た」とされる。当時の医療においては、包帯は通常の医療用具であったという (田川健三訳著『新約聖書 訳と註 5 ヨハネ福音書』(作品社、2013)、pp. 516–517)。

<sup>141</sup> 『新約聖書』『ヨハネによる福音書』11章1–44節に対応。

<sup>142</sup> イエスが十字架に掛けられた時の大祭司。ローマのユダヤ属州総督に任命された神殿の祭司集団の最高責任者で、ユダヤ人社会の代表者として内政の責任を任され、ユダヤ人共同体の政治的主張の役割を担っていた (T. Lohmann+土岐健治「カヤパ」『旧約新約聖書大事典』)。

一人の男が死ぬことは、その民 al-sha'b がすべていなくなってしまうよりもよい」と。それで彼らは彼を殺すことに合意した<sup>143</sup>。

メシアはエルサレムにロバに乗って入った。彼の弟子たち aṣḥāb は棗椰子の葉の束<sup>CXVIII</sup>を持って出迎えた<sup>144</sup>。

メシアの弟子の中にはシメオンの子ユダがいた。メシアは彼の弟子たちに言った。「あなたたちの中に、私を差し出す者がいる。私とともに食べ飲む者の中に」と<sup>145</sup>。つまりシメオンの子ユダのことである<sup>146</sup>。そして彼は弟子たちに遺言し始めた。「人の子が彼の父のもとに行く時間が到来した。私はあなた方が私とともに来ることができないところへ行く<sup>147</sup>。私の遺言を守れ。そうすればあなたたちにパラクレートス al-Fāraqlīt<sup>148</sup>が訪れるだろう。私たちの父<sup>CXIX</sup>は、あなたたちとともにいるだろう<sup>149</sup>。あなたたちのもとに、パラクレートスが真実と信頼の霊 rūḥ をもたらすとき、それは私を証言する者である<sup>150</sup>。まことに、[85]その時が来たときにあなたがたがそれを思い出す<sup>CXX</sup>ように、私はこのことをあなたたちに語ったのだ。まさしく、私はあなたたちにすでに言ったのだ<sup>151</sup>。私について言うならば、私は私を遣わした方のもとへと行く<sup>152</sup>。もし真実の霊 rūḥ が来たなら

<sup>143</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」11章45–53節に対応。

<sup>144</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」12章12節に対応。

<sup>145</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」13章21節に対応。ただし文章はかなり異なる。『新約聖書』「マルコによる福音書」14章18節では「私はあなたたちに言う、あなたたちの一人で、私と一緒に食事をしている者が、私を引き渡すだろう」とあり、より近い表現となっている。『新約聖書』「マタイによる福音書」26章21節では「私はあなたたちに言う、あなたたちの一人が、私を引き渡すだろう」と、『新約聖書』「ルカによる福音書」22章21節では「しかしながら、見よ、私を引き渡す者の手が、私と共に卓上にある」とする。

<sup>146</sup> 「イスカリオテのシモンの子ユダ」と、父の情報が示されているのは『新約聖書』「ヨハネによる福音書」13章26節のみである。

<sup>147</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」13章33節または36節に対応した記述と考えられるが、『新約聖書』「ヨハネによる福音書」13章には「人の子」が彼の父のもとへ行くという文言はない。一方で、「マルコによる福音書」14章21節および「マタイによる福音書」26章24節には「というのたしかに〈人の子〉は彼について書いてある通り、去って行く」と、『新約聖書』「ルカによる福音書」22章22節では、「というの、たしかに〈人の子〉は定められている通り、赴く」と言及されている。

<sup>148</sup> ギリシャ語の paraklētos であり、「傍らに呼ばれたもの」「介添人」を意味する語。『新約聖書』「ヨハネによる福音書」では聖霊、真理の霊を示す表現として用いられる (K. Goldmann+山我哲雄「助け主」『旧約新約聖書大事典』)。イブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』では、「ヨハネによる福音書」15章23節から16章1節までがアラビア語に翻訳された上で引用されており、そこではパラクレートスは「ムナッフマーナー」という語で示され、引用の直後にそれがシリア語でムハンマドを意味すること、またギリシア語では「パラクレートス」ということが記されている (イブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』vol. 1, pp. 226–227)。

<sup>149</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」14章15–16節に対応。

<sup>150</sup> この一文は『新約聖書』「ヨハネによる福音書」15章26節に対応。

<sup>151</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」16章4節に対応。それに準じて、前の文と合わせて「まことに、その時が来たときに私がそれをあなたたちに言ったということをあなたがたが思い出すように、私はこのことをあなたたちに語ったのだ」と読む方が文脈の理解は容易であるように思われるが、接続詞 fa を解釈することが困難である。そのためアラビア語に即して前の文と区切って訳出した。

<sup>152</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」16章5節に対応。

ば、真実すべてにあなたがたを導き、遠い未来のことをあなたたちに伝え、私を讃えるだろう<sup>153</sup>。ほどなくして、あなたがたは私を見なくなるだろう」と<sup>154</sup>。

そしてメシアは天を見上げて言った。「時 al-sā'a が来ました。私は地においてあなたを讃えました。あなたが私に行くように命じた行いについては、私はそれを成し遂げました<sup>CXXI</sup>」と<sup>155</sup>。

彼は言った。「おお神よ、もし私がこの杯を飲まなければならないとしたら、それを私が容易になすことができるようにしてください。そうであることを私が望んだようにではなく、あなたが望んだように。我が主よ<sup>CXXII</sup>」と<sup>156</sup>。

そしてメシアは弟子たち talāmīdh とともに、彼と彼の弟子たち aṣḥāb が集まる場所へと向かった。ユダも使徒 al-ḥawārīyīn の一人であり、その場所を知っていた。彼は衛兵たち shuraṭ がメシアを捜しているのを見ると、彼らと、彼らとともにいる祭司の使者たちを誘導した。そしてユダは彼らとともにその場所に止まった。メシアは彼らのもとに出て行って、彼らに言った。「誰を探しているのか」と。彼らは言った。「ナザレの人イエス<sup>CXXIII</sup>だ」と。メシアは彼らに対して言った。「私がイエス<sup>CXXIV</sup>である」と。それで彼らは去って、その後戻ってきた。メシアは彼らに言った。「私がナザレの人イエス<sup>CXXV</sup>である。もしあなたがたが私を望むなら、私を連れて行け」と。あの言葉 al-kalima が成就するためであった<sup>157</sup>。岩のシモン Shim'ān al-Ṣafā<sup>158</sup> は剣を持っており、それを抜いて<sup>CXXVI</sup>、大祭司 sayyid al-kahana の奴隷に斬りつけ、彼の右手<sup>159</sup>を切り落とした。メシアは言った。「シモンよ、剣を鞘に戻せ。我が主が私に与えた杯を飲むことを、私は拒まない」と<sup>160</sup>。

それで衛兵たちはメシアを捕えて、彼をきつく縛った。そして彼を殺すように言ったユダヤ教徒

<sup>153</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」16章13-14節に対応。

<sup>154</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」16章16節に対応。

<sup>155</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」17章1-4節に対応。

<sup>156</sup> この部分については『新約聖書』「ヨハネによる福音書」には見当たらない。『新約聖書』「マタイによる福音書」26章42節では、「私の父よ、もし私がこれを飲まなければ、それが去っていくことはありえないのであれば、あなたの意思が成りますように」とある。「マルコによる福音書」14章36節では、「この杯を私から取り除いて下さい。しかし、私が望むことではなく、あなたの望まれることを」と、「ルカによる福音書」22章42節では、「父よ、もしお望みならば、この杯を私から取り除いて下さい。しかしながら、私の意思ではなく、あなたの意思がなりますように」とあり、杯を取り除くことを求めている。

<sup>157</sup> ヤアクービーのテキスト自体からは読み取ることはできないが、『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章9節では「『あなたが私に与えてくださっている人々を、そのうちの一人として失いませんでした』と言った、あの言葉が満たされるためであった」とあり、「ヨハネによる福音書」6章39節、10章28節、17章12節の言葉を指している。

<sup>158</sup> 使徒の一人ペトロ（シモン）のこと。イエスは彼にアラム語で岩を意味するケパというあだ名を付けたと言われ、それがギリシャ語では petros となる。ヤアクービーのテキストでもそれが意味をとって al-Ṣafā と訳されているが、この後の「使徒行伝」部分では Butrus と音写される (L: I, 88)。

<sup>159</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章10節では切り落としたのは「右の耳」とされる。英訳の注釈では、これは、シリア語の「耳'ednā」と「手'idā」が混同されたためであると説明している (E: 340, n. 331)。

<sup>160</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章1-11節に対応。

の長 ra'is al-Yahūd<sup>161</sup> カヤファ Qayāfā のもとへと連れて行った。そして岩のシモンは彼の後について歩いてゆき、衛兵 a'wān にまぎれて入っていった。その時岩のシモンにこう訊く者がいた<sup>CXXVII</sup>。「おまえはこのナザレ人<sup>CXXVIII</sup>の弟子たち talāmīdh のうちの一人か」と。彼は言った。「違う」と<sup>162</sup>。メシアが大祭司 ra'is al-Yahūd のもとに連行されると、大祭司はメシアに語り始めたが、メシアは彼に対して彼の理解できないことを答えたので、[86] 衛兵の一人がメシアのあごの両側 fakkay-hi を打った<sup>163</sup>。

そこで彼らはメシアをカヤファのもとからピラトゥス Faratūrīn のもとへと連れて行った<sup>164</sup>。ピラトゥスはメシアに言った。「あなたはユダヤ教徒の王か」と。メシアは彼に言った。「あなた自身がこれを言ったのか、それとも別の者たちが私についてあなたに知らせたのか」と。メシアは彼に対して語って言った。「私の王国は、この世界(のもの)<sup>CXXIX</sup>ではない」と<sup>165</sup>。すると衛兵たちは紫色の冠を取り、メシアの頭に置いて<sup>166</sup>、彼を打ち始めた。そして、冠を彼の頭にかぶせたまま、彼を連れていった。司祭の長たち ru'asā' al-kahana はピラトゥスに言った。「彼を磔にせよ」と。それでピラトゥス<sup>CXXX</sup>が彼らに言った。「おまえたちが彼を捕まえよ。そして彼を磔にせよ。私からすれば、彼には咎を見つけられなかったが」と。彼らは言った。「彼は磔と死罪に十分に値する。というのも、彼は自分が神の子であると言ったからだ」と<sup>167</sup>。そして彼は彼を外に出し、彼らに言った。「おまえたちが彼を捕まえて、磔にせよ」と<sup>168</sup>。それで彼らはメシアを捕まえて外に出し<sup>CXXXI</sup>、彼を磔にする木材を彼に運ばせた<sup>CXXXII</sup>のである<sup>169</sup>。これはヨハネの福音書に書かれていることである<sup>170</sup>。

一方マタイとマルコとルカは、「彼らは、メシアが磔にされた木材をキュレネ人 al-Qirnānī<sup>171</sup>に背

<sup>161</sup> 前段では同じカヤファが「祭司たちの長 ra'is al-kahana」、あるいは「大祭司 sayyid al-kahana」と別の表現で記されているが、注142で示したような当該時期の大祭司の位置付けを反映したものであろう。

<sup>162</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章15-17節に対応。

<sup>163</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章19-22節に対応。

<sup>164</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章28節に対応。

<sup>165</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章33-36節に対応。

<sup>166</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章2節では「兵士たちは茨で冠を編み、彼の頭に載せた。また彼に紫の衣をまとわせた」とある。「マルコによる福音書」15章17節では「また、彼に紫の衣をまとわせ、茨の冠を編んで彼にかぶせる」とある。紫の衣は当時のローマに降った王が着るものとされ(『新約聖書』p. 67, n. 7)、冠とあわせて王の装束(のようなもの)を付けさせたということであろう。ヤアクービーのテキストでは二つの要素が一つになってしまっている。

<sup>167</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章6-7節に対応。

<sup>168</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」にはこの部分に類する文言は見当たらない。『新約聖書』「マタイによる福音書」27章24節では、ピラトゥスは「この者の血には、私は責任がない。お前たちが勝手に始末せよ」と言っている。

<sup>169</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章16-17節に対応。

<sup>170</sup> この一文は、その直前の一文に対するヤアクービーの注釈である。

<sup>171</sup> キュレネはアフリカ池地中海岸リビアの東部に位置するギリシア人によって建設された都市。紀元前1世紀にはアレクサンドリアと並ぶユダヤ教徒ディアスポラの中心地の一つであった。そのため多数のキュレネ出身のユダヤ教徒がエルサレムに住んでいた(長窪専三「キュレネ」『旧約新訳聖書大事典』)。



負わせた」と言っている<sup>172</sup>。

彼らはメシアを「髑髏<sup>どくろ</sup> jamjama」と呼ばれる場所へと連れていった。それはヘブライ語ではイーマーハラ Īmākhala<sup>CXXXIII</sup> <sup>173</sup>といい、彼が磔にされた場所であった。彼とともにまた別の二人の者が、一人は（メシアの）こちら側で、もう一人はもう一方の側で、磔にされた。ピラトゥス<sup>CXXXIV</sup> は板に以下のように書いた。「この者はナザレ人のイエス、ユダヤ教徒の王である」と。司祭の長たちがピラトゥスに言った。「『自分をユダヤ教徒の王だと言った者』と書いてください」と。ピラトゥスは彼らに言った。「私が書いたものは、もう私が書き終えてしまったのだ」と<sup>174</sup>。

そして衛兵たちがメシアの服を分けた<sup>175</sup>。

メシアの母マリヤと [87] クロパ Qilūfā<sup>CXXXV</sup> の娘<sup>176</sup> マリヤ、マグダラのマリヤ Maryam al-Majdalānīya が立ち上がって彼を見ていた。彼は彼の母に木材に架けられた状態で話した<sup>177</sup>。

その衛兵たちが、酢を含んだ海綿<sup>CXXXVI</sup> を取って、メシアの鼻に近付け始めた。彼はそれを不快に思った。その後、彼は彼の霊を引き渡した<sup>178</sup>。

彼らはメシアとともに磔にされた二人<sup>CXXXVII</sup> のところへ来て<sup>CXXXVIII</sup>、二人の脚<sup>CXXXIX</sup> を折った。そして、衛兵たちの一人<sup>CXL</sup> が槍を取って、彼の脇腹に突き刺すと、血と水が出た<sup>179</sup>。

それで、使徒 talāmīdh の一人が、メシアのことについてピラトゥスに話した後、メシアを下ろし、没薬<sup>CXLI</sup> とアロエ<sup>CXLII</sup> などの香料<sup>CXLIII</sup> で防腐処理をし、そして彼を亜麻の服と香料とで包んだ。その場所には庭園<sup>CXLIV</sup> があり、そこには新しい墓があった。彼らはメシアをそこに置いた。それは金曜日のことであった<sup>180</sup>。

キリスト教徒たちの言うところによれば、日曜日になると、マグダラのマリヤが朝早くに墓に行った時、彼女はメシア（の遺体）を発見できなかった。彼女は岩のシモンとメシアの弟子たちの

<sup>172</sup> 『新約聖書』「マタイによる福音書」27章32節、『新約聖書』「マルコによる福音書」15章21節、『新約聖書』「ルカによる福音書」23章26節に対応。

<sup>173</sup> ゴルゴタは、アラム語では Gulgplā', ギリシャ語では Golgotha であって、これはヘブライ語の gulgōlet すなわち「髑髏」に相当する。地名に用いられる「髑髏」は、少し盛り上がっている丘を意味していた (F.W. Eltester+和田幹男『旧約新訳聖書大事典』「ゴルゴタ」)。

<sup>174</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章19-22節に対応。

<sup>175</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章23節に対応。

<sup>176</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章25節では「クロパの妻」。

<sup>177</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章25-26節に対応。

<sup>178</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章25-30節に対応。ただし、海綿を含ませたのが衛兵であるとするのは「ルカによる福音書」23章36節のみ。また、イエスが不快に思ったということに類する文言は四福音書ともに見当たらない。

<sup>179</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章32-34節に対応。

<sup>180</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」19章38-42節に対応。この部分は「それが金曜日だったからである」とも読むことができる。「ヨハネによる福音書」19章31節ではこの日が「準備の日」とされ、その週の安息日（土曜日）が大祭日、すなわち過越の日であると書かれている。また、19章42節では、「それで、ユダヤ人たちの準備の日であったから、その墓が近かったので、そこにイエスを安置した」とある。過越は固定の日であり、その前日が金曜日とは限らないが、このあたりの記述が混同されて理由として記された可能性はある。

ところに<sup>CXLV</sup>来て<sup>CXLVI</sup>、彼らに彼が墓の中にいないと知らせた。そこで彼らも向かったが、彼らも見つけられなかった<sup>181</sup>。

マリヤがもう一度墓に行くと、彼女は墓に白服の二人の男を見た。二人は彼女に言った。「泣くな」と。彼女が後ろを向くと、彼女はメシアを見た。メシアは彼女に語って言った。「私へと近付くな<sup>CXLVII</sup>。というのも、私はまだ私の父のもとへと昇っていないのだから。私の兄弟のもとへ行って、彼らに言え。私は私の父にしてあなたたちの父、私の神 ilāhī にしてあなたたちの神 ilāh-kum のもとへと昇って行く」と<sup>182</sup>。

また日曜の夕方になると、彼は彼らのところに来て言った。「あなたたちのもとに平安あれ。私の父が私を遣わしたように、そのように私はあなたたちを遣わす。もしあなたたちが誰かの罪を許したら、それは許される<sup>CXLVIII</sup>」と<sup>183</sup>。

彼らは言った。「この、私たちに語りかけている者は、霊 rūḥ や幻 khiyāl であろう」と<sup>184</sup>。彼は彼らに言った。「私の指のところにある釘の跡を確かめよ。また私の右の脇腹を<sup>CXLIX</sup>」と。そして彼は彼らに言った。「私を見ずして信じた者たちに祝福あれ」と<sup>185</sup>。彼らは彼に魚の一切れを持ってきたので、彼は食べた<sup>186</sup>。彼は彼らに言った。「もし、あなたたちが私を信用し、私の行いを行うならば [88]、あなた方は、あなた方の手を病人の手に置けば癒され<sup>187</sup>、死が彼を害さなかったということが真実なのである」と。

そして彼は彼らから離れて天に昇って行った<sup>188</sup>。33歳であった<sup>189</sup>。

以上は、福音書の著者たちが言っていることであるが、彼らはあらゆる点で意見を異にしている<sup>190</sup>。神は言った。《彼らは彼（イエス）を殺したのでも<sup>CL</sup>、磔にしたのでもなく、彼らは彼と混同させられたのである。まことにこのことについて分裂する者はそれについて疑念のうちにある。彼らにはそれについての知識はなく、ただ憶測に従っていただけである。そして彼らは確かに彼を殺しはしなかった。そうではなく、神が彼を彼の御許に召し上げ給うたのである。》<sup>191</sup>

<sup>181</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」20章1–10節に対応。

<sup>182</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」20章11–18節に対応。

<sup>183</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」20章19–23節に対応。

<sup>184</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」24章37節に対応。

<sup>185</sup> 『新約聖書』「ヨハネによる福音書」20章27–29節に対応。

<sup>186</sup> 『新約聖書』「ルカによる福音書」24章43節に対応。

<sup>187</sup> 『新約聖書』「マルコによる福音書」16章18節に対応。ただし、『新約聖書』の注釈によると、当該部分は最も重要な写本には欠けている部分であり、内容的にも他の福音書の情報をつなげて作られているという（『新約聖書』「マルコによる福音書」p. 71, n. 5）。

<sup>188</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」1章9節に対応したものか。

<sup>189</sup> イエスの死と復活の時の年齢については、『新約聖書』の四福音書には記述されていない。

<sup>190</sup> 上記部分のイエスの死と復活の部分の指しているものであろう。

<sup>191</sup> 『クルアーン』4章157–158節。

メシアたるイエスが天に昇ると、使徒たちはエルサレム Ūrushalim に向かい、オリーブ山 jabal tūr al-Zaytūn で集まった。そして、彼らはある屋上の部屋 ‘ullīya に行った<sup>192</sup>。そこには、ペトロ Buṭrus、ヤコブ Ya‘qūb、ヨハネ Yūhannā、アンドレアス Andarāwus、フィリッポス Fīlibus、トマス Tūmā<sup>CL</sup>、バルトロマイオス Bartalamūs<sup>CLII</sup>、マタイ Matāwus<sup>CLIII</sup>、ヤコブ Ya‘qūb がいた<sup>CLIV</sup> 193。

シモンは石の上に立って<sup>CLV</sup> 言った。「兄弟たる人々よ、聖なる霊が予言した聖書の中の記述が成就されなければならない」と<sup>194</sup>。彼らは、その者によって<sup>CLVI</sup> 12人であることを完成させる者を一人定めることにした。彼らはマタイとバルサバを前に出して<sup>CLVII</sup> 言った。「神よ、私たちが選ぶべき者を明らかにしたまえ」と。するとマタイに当たった<sup>195</sup>。

激しい風が彼らを害し、彼らのいた部屋を満たした。彼らは火の舌のようなものを見た<sup>CLVIII</sup>。すると彼らは、別々な言葉でしゃべった<sup>196</sup>。

彼らはペトロに言った。「私たちどうすればよいだろうか<sup>CLIX</sup>」と。ペトロは彼らに言った。「悔い改めよ<sup>CLX</sup>。そしてメシアの名においてあなたたちの中のすべての者を洗礼せよ。このねじ曲がった一族 al-qabīla al-mu‘wajja<sup>CLXI</sup> 197 から離れよ」と<sup>198</sup>。

ペトロとヨハネは礼拝所に入った時はいつでも、メシアのことを語り、彼の行いを説明し、人々に彼を崇拜すること ‘ibādat-hi を呼びかけた。ユダヤ教徒たちは、そのために彼ら<sup>199</sup> を非難し、彼らを捕え、牢に入れた。その後彼らを解放した<sup>200</sup>。

彼ら（十二使徒）は言った<sup>201</sup>。「私たちは神の栄光を讃え、彼の知恵、彼のメシアについて語る7人を選ぶ」と。それで彼らはステファノ Iṣṭifānus、フィリッポス Fīlibus<sup>CLXII</sup>、プロコルス Ibruḥūrus<sup>CLXIII</sup>、

<sup>192</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』1章13節では「泊まっていた屋上の間に上がった」とされている。そこでは、その屋上はエルサレムにある建物とされているが、ヤアクービーのテキストの記述の順から判断すると、それはオリーブ山でのことと読める。

<sup>193</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』1章9節、1章12–13節に対応。「使徒行伝」1章13節では11人の名が挙げられているが、ヤアクービーのテキストでは9人の名前が挙げられているにとどまり、「熱心党のシモン、ヤコブの子ユダ」の名は挙げられていない。なお、十二使徒としては、ここには記されていないイスカリオテのユダに代わって、もう一人のマタイが加わったとされる。

<sup>194</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』1章9節、1章12–16節に対応。

<sup>195</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』1章16–26節。「使徒行伝」1章26節では「そして、彼らが彼ら二人のために籤を出したところ、籤はマッテアに当たった。こうして、彼が十一使徒の中に加えられたのである」とあり、マタイが籤に当たったことがわかる。

<sup>196</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』2章2–4節に対応。

<sup>197</sup> 英訳の注釈では、本稿の校訂注 CLXI で示されている両写本の形 (al-qibla) が書写の際の誤りではないと仮定すると、ムハンマドが礼拝の方向 (キブラ) をエルサレムからメッカへと変更したことが、キリスト教における洗礼による改宗と対比されている可能性を指摘している (E: 342, n. 339)。

<sup>198</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』2章37–38節に対応。

<sup>199</sup> 彼ら hum となっているが、ペトロとヨハネの二人を指すと考えられる。

<sup>200</sup> 『新約聖書』『使徒行伝』4章1–3節、4章21節に対応。

<sup>201</sup> ヤアクービーの文脈では、主語はペトロとヨハネであるように思われるが、『新約聖書』『使徒行伝』6章2節によると十二使徒が主語となっている。

ニカノル Nīqānūr<sup>CLXIV</sup> [89]、テモン Tīmūn<sup>CLXV</sup>、パルメナ Barminā<sup>CLXVI</sup>、アンティオキアのニコラオ Nīqūlāwus al-Antākīを選んで、この7人を立たせた。そして彼らはその7人のために祈り、聖別した。その7人はメシアのことを描写し、自分たちの宗教へと人々に対して呼びかけ始めた<sup>202</sup>。

パウロ Bawlus<sup>203</sup> は人々の中でも彼ら（イエスの弟子たち）に対して最も厳しい者、彼らへの害<sup>CLXVII</sup>の最も大きい者であった。彼は彼らの中で彼が殺せる者を殺し、あらゆる場所で彼らを探し求めた。それで彼は、ダマスクスへと、そこにいる人々（イエスの弟子たち）を無理矢理に集めるために出発した<sup>204</sup>。そこで彼は、自分に対して叫ぶ声を聴いた。「パウロよ、どれほど私を抑圧するのか」と。彼は驚き、そして目が見えなくなってしまう<sup>205</sup>。するとアナニア Ḥanānīyā<sup>CLXVIII</sup> が彼のもとに來た。アナニアは彼を聖別 qaddasa して<sup>206</sup>、去った<sup>207</sup>。それで彼の目は癒された<sup>208</sup>。

そして彼はいくつもの礼拝所 kanā'is に立って、メシアについて語り、彼の栄光を称えるようになった。ユダヤ教徒は彼を殺そうとしたが、彼は逃げながら、弟子たち talāmidha とともに人々に宣教し<sup>CLXIX</sup>、彼らが説いていたのと同じようなことを説いた。また彼は、現世<sup>CLXX</sup>において禁欲し、多くを求めないことを示した<sup>209</sup>。

それで、使徒たち al-ḥawārīyūn 全員がパウロを彼ら自身のことについて派遣し、彼らの頭として彼を送り出した。彼は立ち上がって話し、イスラエルの民と預言者たちのことについて語り、また、メシアのことについて語った。

彼は言った。「神がメシアに言ったように私たちとともに諸共同体<sup>CLXXI</sup>へと向かうのだ。すなわち『まことに私はあなたを諸共同体のための光とした。それであなたは地上の諸地方<sup>CLXXII</sup>に救済<sup>CLXXIII</sup>をもたらす<sup>CLXXIV</sup>』と<sup>210</sup>。

彼らのそれぞれが自分の考えで語った。それで使徒たちは言った。「法 nāmūs を守り、あらゆる土地にこの宗教へと呼びかける<sup>CLXXV</sup>者を遣わし、偶像へ犠牲を捧げること、姦通、血を食べるこ

<sup>202</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」6章3-7節に対応。

<sup>203</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」9章1節ではヘブライ名でサウロとなっているが、ヤアクービーのテキストではパウロとしている。

<sup>204</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」9章2節では、「それは、この道に従う者を見つけ次第、男も女も縛り上げ、エルサレムに引いてくるためであった」とある。

<sup>205</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」9章1-9節に対応。

<sup>206</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」9章17節では「両手をサウロの上に置いて、言った」とあり、これがいわゆる「按手の儀礼」（J. Coppens+市川裕「按手」『旧約新訳聖書大事典』）を意味するものであり、祝福行為であると解釈され、アラビア語に翻訳されたものか。

<sup>207</sup> ヤアクービーのテキストでは inṣarafa という動詞が用いられているが、『新約聖書』「使徒行伝」の当該部分には「立ち去った」に類する語は見当たらない。あるいは、「使徒行伝」9章18節にある「目から鱗が落ちる」ことを inṣarafa で指したという可能性も考えられるか。

<sup>208</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」9章17-18節に対応。

<sup>209</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」9章19節に対応。

<sup>210</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」13章46-47節に対応。



と<sup>211</sup>を、人々に対して禁じることが必要だ」と<sup>212</sup>。

パウロは二人の男とともに、アンティオキアへと向かった。それは、洗礼された者たちの宗教 dīn al-Ma'mūdiyya を定着させるためであった<sup>213</sup>。

その後パウロは（エルサレムに）帰ってきて、捕えられ、ローマの王 Malik Rūmiya<sup>214</sup>のもとへと送られた。彼は立ち上がって話し、メシアのことについて語った。人々は、彼が彼らの宗教を駄目にし、メシアについて語り、彼の栄光を称えているという理由で、パウロを殺すことについて一致して誓った<sup>215</sup>。

---

<sup>211</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」15章20節では「ただ、偶像による穢れと、不品行と、絞め殺したものと、血とを避けるようにと、彼らに手紙で指示すべきです」とある。これらは『旧約聖書』の記述から導かれる禁令であるという（『新約聖書』p. 439, n. 9）。一方で、『クルアーン』5章3節でも禁忌とされている「絞め殺したもの」を食べることが、ヤアクービーのテキストにはない理由はよくわからない。

<sup>212</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」15章19–21節に対応。

<sup>213</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」15章22節に対応。

<sup>214</sup> ヤーウにシャッダを付けずにルーミヤと読む時には、都市としてのローマを指す。例えばヤーカート『諸国集成』では、7世紀後半から8世紀初頭にかけて活躍した学者アスマイー al-Asma'ī からの引用として、アンティオキア Antākiya、アパメア Afāmiya、ニカイア Nīqiya、セレウキア Salūqiya、マラティア Malaṭiya を同様の発音をするものとして挙げている（Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, vol. 3, p. 100; R. Traini, “RŪMIYA,” *EL*<sup>2</sup>）。

<sup>215</sup> 『新約聖書』「使徒行伝」23章12節あたりに対応するものか。

## 〈校訂注〉

- I マンチェスター写本では、ハンナの後に一単語書かれている形跡があるが、判読できない状態である (M: 15a)。ケンブリッジ写本では、ハンナと妻の間の下に何か書かれて上から消されている (C: 19b)。刊本ではこれを採用しておらず、本稿の訳出においても採用しなかった。
- II 両写本では *نعود* となっており (M: 15a; C: 20a)、刊本でも同様に1文字目の子音が確定されずに翻刻されている。ここでは子音の判別は不可能であると判断したが、翻訳では暫定的に子音を当てることとした。
- III マンチェスター写本では *شويل* と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では *شويل* となっており (C: 20a)、刊本では後者に従い *شويل* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- IV マンチェスター写本では *نحرايل* と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では *نحرايل* となっており (C: 20a)、刊本では後者に従い *نحرايل* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- V マンチェスター写本では *سوا* と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では *شوا* となっており (C: 20a)、刊本では後者に従い *شوا* と1文字目の子音が確定されずに翻刻されている。ここでは子音の判別は不可能であると判断したが、翻訳では暫定的に子音を当てることとした。
- VI 刊本では両写本にはない *بن برخيا* を補っているが、ここでは両写本に従った。
- VII マンチェスター写本では *زكريا* と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では *زكريا* となっているが (C: 20a)、刊本では *زكرياء* と直されている。ここでは刊本に従った。
- VIII 両写本では、*سبع سنين سنة* となっているが (M: 15a; C: 19b)、刊本では *sab' 'ashara sana* と直されている。ここでは刊本に従った。
- IX マンチェスター写本では *سنيله* と、ケンブリッジ写本では *سنله* となっているが、刊本では *sanbula* と直されている。ここでは刊本に従った。
- X 両写本では *ahad* となっているが (M: 15a; C: 20a)、刊本では *ihdā* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XI 両写本では *sittat 'ashar* となっているが (M: 15a; C: 20a)、刊本では *sitt 'ashara* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XII マンチェスター写本では *al-Halil* と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では *al-Khalil* となっているが (C: 20a)、刊本では *al-Jalil* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XIII マンチェスター写本では *برزني* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *بررني* となっているが (C: 20a)、刊本では *بن زبدي* と直されている。ここではマンチェスター写本の字形に従って解釈した。
- XIV マンチェスター写本では *زبلون* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *اربلون* となっているが (C: 20a)、刊本では *زبلون* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XV マンチェスター写本では *فلي* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *فلي* となっているが (C: 20a)、刊本では *فلي* と直されている。ここではマンチェスター写本の字形に従って解釈した。
- XVI マンチェスター写本では *اسير* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *اشر* となっているが (C: 20a)、刊本では *اشر* と直されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- XVII マンチェスター写本では *اربلون بن سلفوس* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *اربلون بن سلفوس* となっているが (C: 20a)、刊本では *فيلفوس* と直されている。ここでは、両写本の *اربلون بن* については、直前の支族名を誤って記したものと判断し、刊本に従った。
- XVIII マンチェスター写本では *اسحبر* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *اشحبر* となっているが (C: 20a)、刊本では *اشحبر* と直されている。ここではマンチェスター写本の字形に従って解釈した。
- XIX マンチェスター写本では *هرلم* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *فرلم* となっているが (C: 20a)、刊本では *هرلم* と直されている。ここではケンブリッジ写本に従った。
- XX 両写本では *نعوب* となっているが (M: 15b; C: 20a)、刊本では *يعوب* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXI マンチェスター写本では *منستا* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *منسا* となっており (C: 20a)、刊本では後者に従い *منسا* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- XXII 両写本では *نسبه* となっているが (M: 15b; C: 20a)、刊本では *nasab* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXIII 両写本では *بعسل* となっているが (M: 15b; C: 20a)、刊本では *ba'l* と直されている。ここでは刊本に従った。

- XXIV マンチェスター写本では *الخلل* と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では *الحليل* となっているが (C: 20a)、刊本では *الجيل* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXV 両写本では *ahwaj* の後に *min-ka* があるが (M: 15b; C 20a)、刊本では削除されている。ここでは刊本に従った。
- XXVI 両写本では *اسيوع* となっているが (M: 15b; C 20a)、刊本では *Isū'* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXVII 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *šāra* となっているが (C: 20a)、刊本では *šāma* と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では *šāma* となっており (M: 15b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- XXVIII 両写本では *fa-amara* となっているが (M: 15b; C: 20a)、刊本では *fa-mur* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXIX マンチェスター写本では *يسوع* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *شيع* となっているが (C: 20a)、刊本では *يسوع* と直されている。ここではマンチェスター写本および刊本に従った。
- XXX 両写本では *تكتك* となっているが (M: 15b; C: 20a)、刊本では *تكتة* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XXXI マンチェスター写本では *fa-innī* と (M: 15b)、ケンブリッジ写本では *fa-inna* となっており (C: 20a)、刊本では後者に従い *fa-inna* と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- XXXII 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *طوبى* となっているが (C: 20a)、刊本では *طوبى* と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では *طوبى* となっており (M: 15b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された (これ以降も同様)。
- XXXIII 両写本では *a'yun-kum* となっているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では *'ayn-kum* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XXXIV 両写本では *idh* となっているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では *in* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XXXV 両写本では *fa-innī* となっているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では *fa-ayyu* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXVI 両写本では、*abū-nā* となっているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では *abā-nā* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXVII 両写本では、*مسرك* となっているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では *mashī'at-ka* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXVIII 両写本では、*الشرير* の後に *بلسوع المسيح ربنا* と続いているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では、校訂注には書かれているものの、本文テキストには採用していない。ここでは *بلسوع* を *بليسوع* と読み替えた上で両写本に従った。英訳も注で指摘した上で同様に訳出している (E: 333, n. 306)。
- XXXIX 両写本では *yafhūrūna* となっているが (M: 15b; C: 20b)、刊本では *yahfarūna* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XL マンチェスター写本では *معلشكم* と (M: 16a)、ケンブリッジ写本では *معلشكم* となっているが (C: 20b)、刊本では *معلشم* と直されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- XLI 両写本では *wa-lā ilā* となっているが (M: 16a; C: 20b)、刊本では注釈を付した上で *ilā* を削除している。ここでは刊本に従った。
- XLII 両写本では *al-farsh* となっているが (M: 16a; C: 20b)、刊本では *al-quds* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XLIII 刊本では両写本にはない *سلوا* を *rabb-kum* の前に括弧付きで補っているが、ここでは両写本に従った。
- XLIV 両写本では *يعطيك* となっているが (M: 16a; C: 20b)、刊本では *يعطكم* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XLV 両写本では *wa-lladhī* となっているが (M: 16a; C: 20b)、刊本では *allatī* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XLVI 両写本では *yublighu* となっているが (M: 16a; C: 20b)、刊本では *tublighu* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XLVII マンチェスター写本では *يعطون* と (M: 16a)、ケンブリッジ写本では *يعطون* となっているが (C: 20b)、刊本では *taqtafūna* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XLVIII 両写本および刊本では *lā tastatī'ūna wa taqfifūna* となっているが、*wa* があると解釈が困難であるため、ここでは *wa* を削除し *lā tastatī'ūna taqfifūna* とした。

- XLIX 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では لميرونس となっているが (C: 20b)、刊本では هيرونس と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では هيرونس となっており (M: 16a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- L 両写本では وجلوو となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では وجاعوا と直されている。ここでは刊本に従った。
- LI 両写本では العمويه となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では المعومنية と直されている。ここでは刊本に従った。
- LII マンチェスター写本では حقويه と (M: 16a)、ケンブリッジ写本では حقوه となっているが (C: 21a)、刊本では حقوته と直されている。ここでは刊本に従った。
- LIII 両写本では Nāšira al-Khalīl となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では Nāšira al-Jalīl と直されている。ここでは刊本に従った。
- LIV マンチェスター写本では sawt の後に min al-samā' と書かれているが、取り消し線が引かれている (M: 16a)。ケンブリッジ写本では、sawt の後に min al-samā' と書かれ (C: 21a)、ケンブリッジ写本を底本とした刊本でも、そのまま本文テキストとして採用されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- LV マンチェスター写本では الحليل と (M: 16a)、ケンブリッジ写本では الخليل となっているが (C: 21a)、刊本では الجليل と直されている。ここでは刊本に従った。
- LVI 両写本では راتيه となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では ra'ytu-hu と直されている。ここでは刊本に従った。
- LVII マンチェスター写本では بلنيا と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では بلنا となっているが (C: 21a)、刊本では Abiyā と直されている。ここでは刊本に従った。
- LVIII 両写本では السيفع となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では Alyasba' と直されている。ここでは刊本に従った。
- LIX マンチェスター写本では السيفع と (M: 15a)、ケンブリッジ写本では السيفع となっているが (C: 21a)、刊本では Alyasba' と直されている。ここでは刊本に従った。
- LX マンチェスター写本では جماعة الشعوب となっているが (M: 16a)、ケンブリッジ写本では الشعوب が脱落している (C: 21a)。刊本でも後者に従い الشعوب が脱落している。ここではマンチェスター写本に従った。
- LXI 両写本では نهرين となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では tarhabunna と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXII 両写本では al-farah となっているが (M: 16a; C: 21a)。刊本では al-farah と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXIII 両写本では يحلى となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では يمتلى yamtala'u と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXIV 両写本では القفي となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では النبي と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXV 両写本では أوليا となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では لياء と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXVI 両写本では شعيا となっているが (M: 16b; C: 21a)、刊本では شعيا と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXVII 両写本では yakūnu となっているが (M: 16a; C: 21a)、刊本では yakūnū と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXVIII 両写本では law となっているが (M: 16b; C: 21a)、刊本では li と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXIX 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では الهيكل となっているが (C: 21b)、刊本では الهيكل と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では الهيكل となっており (M: 16b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- LXX マンチェスター写本では السقع と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では السيفع となっているが (C: 21a)、刊本では Alyasba' と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXI 両写本では ليمحوا となっているが (M: 16b; C: 21b)、刊本では ليمحو と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXII 両写本では الحليل となっているが (M: 16b; C: 21a)、刊本では الجليل と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXIII 両写本では السماء となっているが (M: 16b; C: 21b)、刊本では النساء と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXIV マンチェスター写本では قفل と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では هفل となっているが (C: 21b)、刊本では



- と直されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- LXXV マンチェスター写本では *واقيت* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *واقت* となっているが (C: 21b)、刊本では *واقيت* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXVI マンチェスター写本では *نحق* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *نحق* となっているが (C: 21b)、刊本では *نحق* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXVII マンチェスター写本では *ايسوع* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *ايشوع* となっているが (C: 21b)、刊本では *ايسوع* と直されている。ここではマンチェスター写本および刊本に従った。
- LXXVIII 両写本では *وسميه* となっているが (M: 16b; C: 21b)、刊本では *wa-summiya-hu* となっている。ここでは両写本の形に基づき *wa-tusammī-hi* と読んだ。
- LXXIX マンチェスター写本では *فارج* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *فارج* となっているが (C: 21b)、刊本では *bi-farah* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXX 両写本では空白はないが (M: 16b; C: 21b)、刊本ではこの後に空白を挿入している。ここでは両写本に従った。
- LXXXI 両写本では *أشرف* となっているが (M: 16b; C: 21b)、刊本では *ashraqa* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXXII マンチェスター写本では *لوا* となっているが (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *لوا* となっており (C: 21b)、刊本では後者に従い *لوا* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- LXXXIII マンチェスター写本では *نلم* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *نلم* となっているが (C: 21b)、刊本では *نلم* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXXIV 両写本では *وقل قد أبصرت* となっているが (M: 16b; C: 22a)、刊本では *وقل قد أبصرت* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXXV 両写本では *له* となっているが (M: 16b; C: 22a)、刊本では *به* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXXVI 両写本では *مسيحي* となっているが (M: 16b; C: 22a)、刊本では *masaha-nī* と直されている。ここでは刊本に従った。あるいは両写本に従って「貧しい者たちに福音を知らせるための私のメシア」とすることも可能かもしれない。
- LXXXVII マンチェスター写本では *المسين* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *المسين* となっているが (C: 22a)、刊本では *المسين* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXXXVIII マンチェスター写本では *المسى* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *المسى* となっているが (C: 22a)、刊本では *masbī* と直されている。英訳ではマンチェスター写本を *musī* と読み *wrongdoer* と訳している (E: 337, n. 322)。ここでは刊本に従った。
- LXXXIX マンチェスター写本では *ينحى* と (M: 16b)、ケンブリッジ写本では *نحى* となっているが (C: 22a)、刊本では *نحى* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XC 両写本では *يوحنه* となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では *يوحنا* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XCI マンチェスター写本では *السيح* と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では *الشح* となっているが (C: 22a)、刊本では *السلح* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XCII 刊本では両写本にはない「闇は」*wal-ṣalām* が補われているが、ここでは両写本に従った。
- XCIII 刊本では『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章6節に則して、この一文の前に両写本にはない「一人の人間がいた」*kāna insān* が補われているが、両写本に従ってこれを採らなかった。これによりその直後の *kāna arsala-hu* のうちの目的語 *hu* の指示対象が見当たらなくなってしまうが、その直後に登場するヨハネが先行していると解釈した。
- XCIV 両写本では *al-shahāda* となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では *lil-shahāda* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XCV 刊本では『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章10節に則して、両写本にはない「世界は」*wal-‘ālam* が補われているが、両写本に従ってこれを採らなかった。
- XCVI マンチェスター写本では *الاخلصه التي بعيل خلصته لم يقبله* と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では *الاخلصه التي بعيل خلصته لم يقبله* となっているが (C: 22a)、刊本では *الى خلصته اتي وخلصته لم يقبله* と直されている。ここでは刊本に従った。

- XCVII 両写本では **وَأَمْنُوا** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **وَأَمَّنُوا** と直されている。ここでは刊本に従った。
- XCVIII 両写本では **بِسْمِ اللَّهِ** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **بِسْمِهِ** と直されている。ここでは両写本に従った。
- XCIX 両写本では **وَلَا** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **وَلَا** と直されている。ここでは刊本に従った。
- C 両写本では **وَاللَّوَا** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **وَلَا** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CI 両写本では **الْكَلِمَةُ** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **وَالْكَلِمَةُ** と直されている。ここでは両写本に従った。
- CII 両写本では **وَأَرْبِنَا** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **وَأَرْبِنَا** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CIII 両写本では **قَم** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **قَم** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CIV 両写本ではこの後に **كَمَلَهُ** があるが (M: 17a; C: 22a)、刊本では削除されている。ここでは両写本に従った。
- CV 両写本と刊本はともに **kullamā** となっているが、Ferré の指摘に従って **kull-nā** と読む (A. Ferré, “Al-Ya‘qūbī et les Évangiles”, *Islamochristiana* 3 (1977), pp. 65–83, esp. p. 74)。
- CVI マンチェスター写本では **بِئَا** となっているが (M: 17a)、ケンブリッジ写本では **بِئَا** となっており (C: 22a)、刊本では後者に従い **بِئَا** と翻刻されている。ここではケンブリッジ写本および刊本に従った。
- CVII 刊本では『新約聖書』「ヨハネによる福音書」1章18節に則して、この文の後に空白があると示されているが、両写本では空白なしにつながっている (M: 17a; C: 22a)。ここでは両写本に従い、空白を想定せずに訳出した。
- CVIII 両写本では **umm-hā** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **abi-hā** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CIX マンチェスター写本では **سِتْ عِينَا** と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では **سِتْ عِينَا** となっているが (C: 22a)、刊本では **سِتْ عِينَا** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CX 両写本では **الْعَزْر** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **الْعَزْر** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXI ここでは両写本も刊本も **لْعَزْر** となっており、ヤーウが脱落し、最初のアリフとラームが定冠詞と解されている。
- CXII マンチェスター写本では **الْعَزْر** と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では **الْيَغَزْر** となっているが (C: 22a)、刊本では **الْعَزْر** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXIII マンチェスター写本では **لِلْعَزْر** と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では **لِلْيَغَزْر** となっているが (C: 22a)、刊本では **لِلْعَزْر** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXIV マンチェスター写本では **رَجَلَا** と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では **رَجَلَا** となっているが (C: 22a)、刊本では **رَجَلَا** **rijlā-hu** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXV 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では **مَشُونَتْن** となっているが (C: 22a)、刊本では **مَشُونَتْن** と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では **مَشُونَتْن** となっており (M: 17a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CXVI マンチェスター写本では **وَكُنْ** となっているが (M: 17a) ケンブリッジ写本では **وَكُنْ** と **وَكُنْ** の間に **وَكُنْ** が書かれており (C: 22a)、刊本では **وَكُنْ** と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- CXVII 両写本では **الْعَزْر** となっているが (M: 17a; C: 22a)、刊本では **الْعَزْر** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXVIII マンチェスター写本では **نَقُوب** と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では **نَقُوب** となっているが (C: 22b)、刊本では **نَقُوب** と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXIX マンチェスター写本では単語の最初に、半ば消えているが、アリフがあり、**سَا** と読める (M: 17a)。しかし、弁別点は打たれていない。このアリフを採用するならば、**abi-nā** と読むことが可能である。ケンブリッジ写本ではアリフはなく、**سَا** としている (C: 22b)。刊本もこれに従って **سَا** と翻刻している。英訳は、写本は **سَا** と書いているとするが、意味をとって **nabīy<sup>an</sup>** と読むことを選択し、その上で、パラクレートスを預言者とみなすことが、イブン・イスハークの『預言者伝』などに見られるイスラーム的要素の反映であると指摘している (E: 339, n. 327)。ここではマンチェスター写本の字形に従って解釈した。
- CXX 両写本では **تَنْكُرُونَهُ** となっているが (M: 17a; C: 22b)、刊本では **تَنْكُرُوهُ** と直している。ここでは刊本に従った。
- CXXI 両写本では **وَقَدْ** となっているが (M: 17a; C: 22b)、刊本では **وَقَدْ** と直されている。ここでは両写本に従った。

- CXXII マンチェスター写本では rabbī となっているが (M: 17a)、ケンブリッジ写本では rabb となっており (C: 22b)、刊本では後者に従い rabb と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- CXXIII マンチェスター写本では يسوع と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では الشوع となっているが (C: 22b)、刊本では يسوع と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXIV マンチェスター写本では يسوع と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では اسوع となっているが (C: 22b)、刊本では يسوع と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXV マンチェスター写本では يسوع と (M: 17a)、ケンブリッジ写本では يسو となっているが (C: 22b)、刊本では يسوع と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXVI 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では fa-htaraṭa となっているが (C: 22b)、刊本では fa-khtarata-hu と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では fa-khtarata-hu となっており (M: 17b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CXXVII 両写本では قل となっているが (M: 17b; C: 22b)、刊本では قيل と直されている。ここでは両写本に従った。
- CXXVIII 両写本では النصراني となっているが (M: 17b; C: 22b)、刊本では النصرى と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXIX 刊本では『新約聖書』「ヨハネによる福音書」18章36節に則して、両写本にはない min が補われているが、ここでは両写本に従った (M: 17b; C: 22b)。
- CXXX 両写本では فيلاطوس となっているが (M: 17b; C: 22b)、刊本では فيلاطوس と直されている。ここでは両写本に従った。
- CXXXI マンチェスター写本では فلخرجه と (M: 17b)、ケンブリッジ写本では فلخوه となっているが (C: 22b)、刊本では وأخرجه と直されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- CXXXII 両写本では وحلوا となっているが (M: 17b; C: 22b)、刊本では وحلوه と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXXIII マンチェスター写本では īmākhālah となっているが (M: 17b)、ケンブリッジ写本および刊本では īmākhālah となっている (C: 22b)。おそらくは「ゴルゴタ」の音写を示す一単語が記されていたと考えられ、校訂者は注釈で bi-Khulkhālah という読みの可能性を指摘している。ここではマンチェスター写本に従った。
- CXXXIV 両写本では فيلاطوس となっているが (M: 17b; C: 22b)、刊本では فيلاطوس と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXXV 両写本では Qilūfa となっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本では Qilūfa と直されている。ここでは両写本に従った。
- CXXXVI マンチェスター写本では اسقحه と (M: 17b)、ケンブリッジ写本では اسسقحه となっているが (C: 23a)、刊本では isfanja と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXXVII マンチェスター写本では ذلك と (M: 17b)、ケンブリッジ写本では ذلك となっているが (C: 23a)、刊本では نيك と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXXVIII 両写本では فجعلوا となっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本では فجاءوا と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXXXIX 両写本では سيفهما となっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本では سوقهما と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXL マンチェスター写本では والد のように書かれているが (M: 17b)、最初に لحد と書いてから لحد と直したものか。ケンブリッジ写本では والد となっているが (C: 23a)、刊本では لحد と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLI マンチェスター写本では مريم と (M: 17b)、ケンブリッジ写本では مريم となっているが (C: 23a)、刊本では م と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLII 両写本では صبرا となっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本では صبر と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLIII マンチェスター写本では خيوطا と (M: 17b)、ケンブリッジ写本では حيوطا となっているが (C: 23a)、刊本では خوطا と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLIV 両写本では اهبār となっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本では جن jinān と直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLV 両写本では إلى شمعان となっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本では ى 脱落している。ここでは両写本に従った。
- CXLVI マンチェスター写本では فجك と (M: 17b)、ケンブリッジ写本では فجاه となっているが (C: 23a)。刊本で

- はفجاعتと直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLVII マンチェスター写本ではلا يبن لي (M: 17b)、ケンブリッジ写本ではلا يبن ليとなっているが (C: 23a)、刊本ではلا تبن ليと直されている。元の形により忠実にلا يبن ليすなわち「私の父からでなければならない」とも解釈できるが、『新約聖書』「ヨハネによる福音書」20章17節にある「私にしがみつくなはよしなさい」という文言との整合性から、ここでは刊本に従った。
- CXLVIII マンチェスター写本ではمغره (M: 17b)、ケンブリッジ写本ではمغرهとなっているが (C: 23a)、刊本ではمغورهと直されている。ここでは刊本に従った。
- CXLIX 両写本ではاليとなっているが (M: 17b; C: 23a)、刊本ではواليと直されている。ここでは刊本に従った。
- CL マンチェスター写本では文の冒頭がوماとなっているが (M: 17b)、ケンブリッジ写本ではماとなっており (C: 23a)、刊本では後者に従い ما と翻刻されている。ここではマンチェスター写本に従った。
- CLI マンチェスター写本ではيوما (M: 18a)、ケンブリッジ写本ではيوماとなっているが (C: 23a)、刊本ではوماと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLII 両写本ではبرلموسとなっているが (M: 18a; C: 23a)、刊本ではبرلموسと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLIII 両写本ではسلوسとなっているが (M: 18a; C: 23a)、刊本ではمتلوسと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLIV 刊本では両写本に見られない空白を9人目に言及されているヤコブ Ya'qūb の後に補っているが、ここでは両写本に従った。
- CLV 刊本の底本とされたケンブリッジ写本ではقلとなっているが (C: 23a)、刊本ではقلمと直されている。当該箇所はマンチェスター写本ではقلمとなっており (M: 18a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CLVI 両写本ではلهとなっているが (M: 18a; C: 23a)、刊本ではبهと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLVII 刊本の底本とされたケンブリッジ写本ではقموとなっているが (C: 23a)、刊本ではقموと直されている。当該箇所はマンチェスター写本ではقموとなっており (M: 18a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CLVIII 刊本の底本とされたケンブリッジ写本ではوروとなっているが (C: 23a)、刊本ではورواと直されている。当該箇所はマンチェスター写本ではورواとなっており (M: 18a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CLIX マンチェスター写本および刊本ではتصنع (M: 18a)、ケンブリッジ写本ではتصنعとなっている (C: 23a)。『新約聖書』「使徒行伝」2章37節では「兄弟たちよ、私たちはどうしたら良いのでしょうか」とあり、これに対応するものと考え、تصنع と読んだ。二人称であるとするならば、その後にペトロが命令で返していることと整合性が取れない。
- CLX 両写本および刊本ではقوماとなっているが (M: 18a; C: 23a)、英訳の注釈では、『新約聖書』「使徒行伝」2章38節のペトロの言葉「悔い改めなさい」に則して、明らかにtūbūの誤りであろうと指摘している (E: 342, n. 339)。ここでは英訳における指摘に従った。
- CLXI 両写本ではالقهلةとなっているが (M: 18a; C: 23a)、刊本ではالقيلةと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXII マンチェスター写本ではفليس (M: 18a)、ケンブリッジ写本ではفليسとなっているが (C: 23b)、刊本ではفليسと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXIII 両写本ではايرحورسとなっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本ではايرحورسと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXIV マンチェスター写本ではسعرسوس (M: 18a)、ケンブリッジ写本ではبيعرسوسとなっているが (C: 23b)、刊本ではنقفورと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXV 両写本ではطميونとなっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本ではطيونと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXVI マンチェスター写本ではنوسا (M: 18a)、ケンブリッジ写本ではنوساとなっているが (C: 23b)、刊本ではبرمناと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXVII 両写本ではريالهمとなっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本ではلبناء لهمと直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXVIII 両写本ではحبلناとなっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本ではحنلياと直されている。ここでは刊本に従った。



- CLXIX 両写本では يدعو となっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本では يدعو と直されている。ここでは両写本に従った。
- CLXX 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では النى となっているが (C: 23b)、刊本では النيا と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では النيا となっており (M: 18a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CLXXI 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では للامم となっているが (C: 23b)、刊本では للام と直されている。当該箇所はマンチェスター写本では للام となっており (M: 18a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- CLXXII マンチェスター写本では افطر と (M: 18a)、ケンブリッジ写本では افطر となっているが (C: 23b)、刊本では افطر と直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXXIII 両写本では احلاما となっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本では اخلاصا と直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXXIV マンチェスター写本では فيصير と (M: 18a)、ケンブリッジ写本では فصير となっているが (C: 23b)、刊本では قصير と直されている。ここでは刊本に従った。
- CLXXV 両写本では يدعو となっているが (M: 18a; C: 23b)、刊本では يدعو と直されている。ここでは両写本に従った。